

平成4年度決算報告書 (保月区) (平成5年3月31日現在)

取 入			支 出		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
前年度繰越金	642,557		春秋祭経費	45,701	春秋 22,320円 23,381円
故郷を愛する 会より神酒料	10,000	春祭り、秋祭 り地藏盆	総会事務費	6,967	郵便はがき 金銭出納帳 コピー代
会員の祭礼費	54,000	春祭り 27,000円 秋祭り 27,000円	総会用食糧費	30,623	弁当、ビール、 酒、ジュース
納税報償金	4,900	一般分 2,900円 国保税分 2,000円	秋祭食糧費	30,554	弁当30ヶ、外 4品
八幡神社賃銭	39,375	春秋 18,402円 18,333円 2,640円	八幡神社 参道舗装費	119,892	299,730× 40%
地藏堂賃銭	24,526		同上、砂利敷 費	82,400	
寄付金	74,000	川瀬氏より神 社用として	社務所用備品	74,000	戸嵜4枚代 神社招魂碑
定額貯金 私戻金	500,000	ケヤキ売却代 30万円 能登千鶴恩さ ん寄付20万円	除草剤 地藏盆供物代 交際費	4,390	
郵便局貯金利 子	74,946	定額30万— 55,014円 〃 20万— 6,164円 普通貯金 13,768円	近電関係 9,690円 県道関係 8,400円 一門、木曾火 事見舞酒4本 町森林賦課金 1,480円 町民会議費 1,200円 照西寺建物共 済金 1,763円 多賀中学後援 会費 2,500円 社務所及外灯 6 外灯修理 5,000円	25,610	
町役場補助金	39,530	事務委託料 31,110円 道路愛護 3,200円 交通災害 220円	各負担金	6,943	町民会議費 1,200円 照西寺建物共 済金 1,763円 多賀中学後援 会費 2,500円 社務所及外灯 6 外灯修理 5,000円
農協協力謝金	5,300		電気代	20,185	町役場よりの 分
農協貯金利子	1,154		事務委託料	31,100	平成4年度分 2人分
関電敷地料	1,290		区長報酬	10,000	
			副区長報酬	10,000	
取入合計	1,473,578		支出合計	504,009	
			次年度へ繰越	969,569	

古くから次のような慣習が守られている。

①字有の山林を割山として、個人に配分し、所有権登記してあるが、他人には売却してはならない。

②四つある井戸は共有して管理する。

③字内の雪あけは「堂奥の井戸」に向かって、隣家まで責任を持つ。

④畑は境界線から必ず、当三〇坪を離して作付けする。

⑤雪の中を小・中学生が保月の学校に通うときは、男の年長者が先頭で、男・女の順に列を組む。父兄が交替で付き添い、終業まで待機し、一緒に帰る。

⑥春日神社の経費は、各戸五束の割木を持ちよって、その売上金で賄う。

⑦例年九月一日を八朔と呼び、村の経費分担金や個人の借貸を精算する。

⑧栗栖から杉までの道路の雪の踏みつけや道路補

修、草刈りは杉の責任で行う。ただし、作業量の多い時は保月、五僧の応援を受ける。

春日神社の祭典は四月中旬、九月中旬の日曜日を選り多賀大社の神官を招き、二戸ずつの順で宮当番が世話をする。全戸家族連れで参詣し、みんなが出会い、楽しいひとときを過ごす。

光明寺は八重練の香積寺の住職に兼務を依頼し、一月に報恩講を厳修している。

共有林四畝は五月の連休に共同作業を行い、多賀大社の万灯祭には杉坂峠で御神火の奉仕を実施している。

(2) 山村集落の今昔—桃原の場合

① 古文書に見られる桃原

桃原という集落はいつごろからあったのかは不明であるが「頼継郷記」に次のような文書がある。

江州大土郡多賀庄内桃原村無常三昧堂・建立事、被_レ開食_ノ畢者。天氣如此。悉_レ之。以上。

永正十二年（一五一五）六月一七日

右少弁判

西性寺（大阪府岸和田市春木町）の古文書によると「天正十二年（一五八四）二月二〇日に近江国多賀之庄茂原村浄光寺より釈子喜なる僧により西性寺を開基せり」とある（『西性寺四〇〇年』による）。

桃原城は桃原の南方阿弥陀ヶ峯に城址があつて、土塁が残っている。桃原は古くから美濃多良村および北伊勢へ抜ける五僧越えの間道に当たる要地で、応仁の乱に京極政高が築城した。

応仁二年（一四六八）京極氏一世勝秀死去し、子高清幼少のため後見人をめぐって、勝秀の弟政光と政高が争った。

政高は桃原城を本拠として、東軍細川方に従った。

政光は六角高頼とともに西軍山名方に属した。明応二

年（一四九三）高清は美濃の斎藤利国の援を得て桃原城を攻め、政高は敗れて退城した（昭和五四年五月朝日新聞「近江の城」日本古城友の会幹事吉田勝氏による）。

桃原城のあった阿弥陀ヶ峯の頂上には男塚・女塚といわれる一対の塚にそれぞれ巨大な杉の原木があつた。男塚の原木は切られたが、女塚の原木の下には地蔵石仏が安置されている。昔から、早魃が続くと、村人は御酒をもって水神祭りといって、雨乞いを行った。経塚にはお寺の経文が埋められると伝えられている。

桃原城は町史上巻五〇六ページに記載されているように平地の騒乱を避ける要害の地で、詰め城といって、最後の拠点とする城であつた。

桃原の集落は東側のかくれた傾面にあつて、外部から集落を発見することはできない場所に存在している。地名に堂建、薬師堂、西堂正円（在園）・音羽地・古座・木戸が残っている。また日吉神社や墓地には石

塔や五輪塔が残っており、その昔寺院があつたことが推察される。大火によって古文書が残っていないので、それを裏づけることは不可能である。

② 桃原の人口の変遷

元禄八年（一六九五）大洞弁財天寄進帳によると戸数八七戸、男一八四人・女一八二人、計三六六人、ほかに寺社方男三人・女三人と記録されている。

明治二〇年（一八八七）の記録では戸主本田松平ほか六〇戸、男一四四人・女一一一人、計二五五人、ほかに寺三ヶ寺男五人・女四人である。

その古文書により次のことが分かる。

①五〇歳〜六〇歳で隠居して、子供に戸主を譲っている。

②幼少時の死亡が目立ち、一五年間に六三人生まれ三九人が五歳までに死んでいる。

③子供の数が多い。死んだ子の名前を次の子に付け

表4 桃原集落の世帯数および人口構成（明治20年）

	0~14	15~20	21~39	40~59	60~	計
世帯数	64					
男	56	17	37	31	8	149人
女	28	8	41	28	10	115人
計	84	25	78	59	18	264人

る場合が多い。小さい時男の子は養子（一六人）にやるが、帰っている者も多い。

④ 離婚が多い。

⑤桃原へ他所から嫁に来ている数は一五人、養子が二人。桃原から他所へ嫁に行っている数は一七人、養子が四人である。昔から他集落との交流があつたことがうかがえる。

⑥当時の人口の年齢別構成は表4のとおりである。

明治四三年に大火があつ

表5 桃原集落の人口・戸数の変化

年	1955 (昭30)	1960 (昭35)	1965 (昭40)	1970 (昭45)	1975 (昭50)	1981 (昭56)	1986 (昭61)	1991 (平3)	1993 (平5)
戸数	39	38	31	20	11	8	5	5	4
人口	163	156	107	84	38	12	12	11	10

て、当時の横山区長の指示により、消防組織強化と器具取り扱いはならびに保管、管理の台帳が作成された。それによると、

駕口班 上田藤九郎他四名
運水器班 上田伊平他一名

の計四五世帯の名前が記されている。

大正六年には戸数三八戸、人口二四八人、大正一一年には戸数四〇戸、人口一八二人となっている。

昭和八年九月現在戸数四〇戸、人口一〇八人であった。

戦争が激化し、都市からの疎開により、終戦当時戸数四六戸であった。戦後生活が安定し、

元の職業を再興する者、新しい職を求めて、転出する者もいた。

昭和三〇年以降の桃原の戸数・人口の変化は表5のとおりである。

③ 調査表の集計とその考察

桃原を離村した年代・行き先・原因・村を出たときの状態・現況・その他について調査のため、住所の判明している人に調査表を送付した。発送四三通、回答三九通、回答率九〇％である。離村者には高齢であったり、死亡して代が替わり、回答が不可能の人もあつてやむを得ない。調査結果は表6のとおりである。

調査結果とその考察

1、離村の年代(表6)

○昭和二〇年代の離村者は終戦によって、以前やっていた仕事に就くため。

○勤務の都合で離村した。

○昭和三〇年代の離村した者は経済状態の変化に伴い、新しい職をみつけて離村した。

○昭和四六年木曾団地ができて、家を建築して離村した。

○現在四戸・一〇人の在住者は、彦根・木曾に子供の家を持ち、年齢も全員六〇歳以上である。

2、行き先

2、どこへ出られましたか。

①多賀町内 八(二〇%) ②彦根市 九(二三%)

③滋賀県内(多賀町・彦根市以外) 三(七%)

④大阪 一二(三〇%) ⑤その他の府県(よければ

府県市名をお書きください) 三(七%)

⑥桃原にいたるが他に家を持っている 四(一〇%)

右表のとおりで、大阪が一番多いのは戦前二戸の莫大小工場を経営した関係と戦後大阪で成功者が出たこ

表6 離村した年と戸数

年	昭9	昭10		昭13	昭14		昭17				計
戸数	2	1		2	1		2				8
年	昭20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
戸数		1		3		2			1	1	8
年	昭30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	
戸数				1	1	2	3		3	1	11
年	昭40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	
戸数	1			1	1	2	2			2	9
年	昭50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	
戸数	2	1									3

とに原因する。

3、原因

3、村を出られた原因について

①村で働いても生活ができにくくなったから 一三
(二六%)

②村で働く仕事が無くなった(畑仕事、割木、セメント工場の閉鎖) 一(二%)

③勤務の都合で通勤が不便になった 五(一〇%)

④よい働き口がみつかなかったから 五(一〇%)

⑤子供の教育上 一(二)(二四%)

○雪が多くて通学が不便(義務教育)

○高等学校へやるため下宿をさせねばならない(五)

⑥戦争中疎開していた 二(四%)

⑦以前の経験を生かすため 三(六%)

⑧新しい仕事をやってみたいため 七(一四%)

⑨主人がなくなったため(他所から嫁に来ていた)

二(四%)

⑩火事で家がなくなったから

○燃料革命によって、割木が売れなくなり、牛糞・煙草などでは生計が立たなくなった。

○次に教育問題で、冬高等学校に通学することは不可能なこと。小学校の児童も積雪期の送り迎えができなくなった。

4、村を出たときの状態

4、村を出られた時の状態について

①一人が村を出た 五(一四%)

②若い夫婦が出た 五(一四%)

③子供と一緒に出た 七(二〇%)

④一家全員で出た 一八(五一%)

⑤親は残った 一(二)(三四%)

村を出る時の状態

①山や畑はそのままにして出た 二五(七一%)

②山や畑を売って出た 二(五%)

③現在山は村にある 一六(四五%)

④現在家が村にある 一六(四五%)

6、その他

多賀町・彦根市の在住者は山の手入れに帰っていかねばならない、植林すれば十数年世話がかかるなどからあまり山に魅力を感じなくなっている。

墓参りなどに年一、二回帰る者が多い。

〔村への希望等〕

村へ帰りますか。

①時々帰る 一四(四〇%) ②山仕事等でよく帰る 三

(八%) ③年に一、二回帰る 一一(三二%) ④全然帰

らない 六(一七%) ⑤将来村に帰ろうと思っている

二(五%)

道が出来て

①便利になったので村を出た

②山の手入れや植林等よく帰るようになった 六

(二七%)

③村に親しみを感ずるようになった 一一(三三%)

○若い者が新しい仕事を求めて出て行って、親が先祖の畑を守っていた。親も年をとるし、生活が安定してきたので、呼び寄せた。

○一般的に家・山を売却しないで畑に植林して離村した。自分で植林の世話のできる者は、春の木起こし、夏の下刈りに帰った。できない者は村の人に依頼していた。

○畑は山林に変わったが、山の所有についてはあまり変化はない。

○空き家になって茅葺きの家は一〇年、瓦葺きの家でも三〇年もたてば崩れるか、住めなくなる。家はあるという回答が一六戸とあるが、住めない家もある。

5、現況

自営業一六 会社勤務一一 夫婦共働き三 無職九
記入者が高齢化して無職の者が多くなったこと。自営業が非常に多く、成功して盛大に事業している者が多い。

○村の人に感謝している。
○自動車道ができ、村の人たちの管理によって、お墓参りができ喜んでいる。
○少年時代の思い出があり、懐かしい。学校が閉鎖され寂しい。

○村の活性化をはかるよう協力してほしい（在住者）。
○豊かな自然を生かした施設を作ってほしい。テニスコート・クラブハウスなど。

○二ヶ寺の統合を希望する。

○私は帰りたい気持ちがあるが、現況ではどうにもならない。

○将来村へ帰らないと考えている者八人、帰りたいが、冬の生活が心配である。

④ 桃原の産業と生活状態

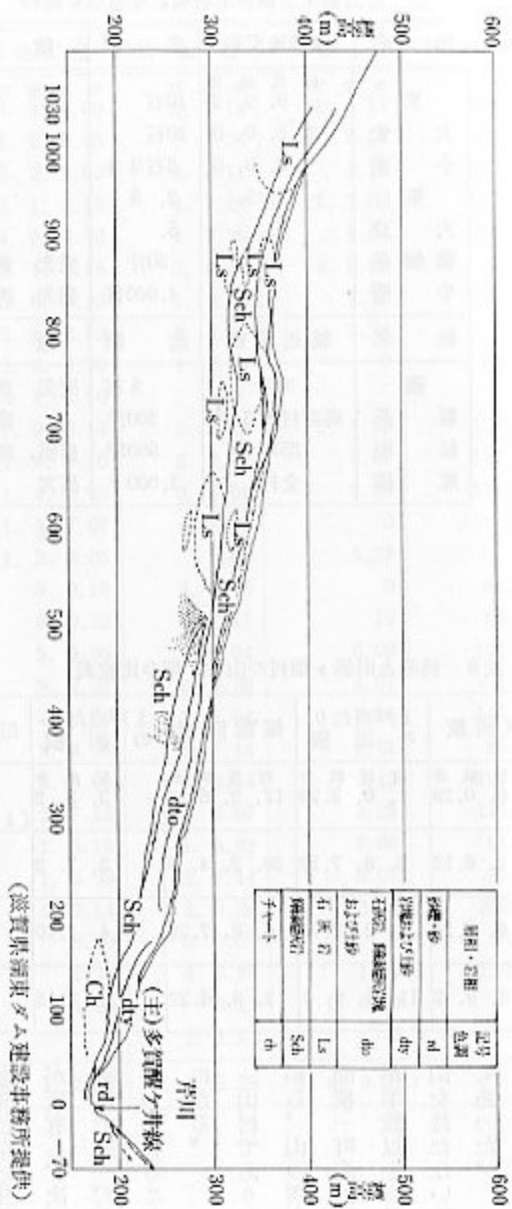
桃原の鈴鹿山地北部にあり、阿弥陀ヶ峰を扇のななめとし、開いた扇を逆さにした地形である。仏生寺衝

上断層によってできた広い台地に、石灰岩の風化した肥沃な土壌が堆積した耕地をもっている。標高三一〇〜三七〇層に集落がある（桃原の地層調査表）。三方を山に囲まれ、北一方のみが開け、芹川をへだてて屏風・後谷・水谷がある。
やや日本海側気候区になっていて、冬季は積雪も多い。昭和一〇年ごろから昭和三〇年ごろまでスキー場となっていた。

明治一二年（一八七八）『県物産誌犬上郡巻八之二』によると戸数五二戸、人口二五五人、反別一一九町六畝五歩。田地九反二畝二歩、畑地一七町二反六畝一六歩、茶園三町歩、宅地二町七反五畝二九歩、山地八一町六反五畝二九歩、林地一反六畝二六歩、雑地一六町六畝一歩、除税地二反二畝一歩。

農業上産物、その他の産物は（表7）のとおりである。『滋賀県物産誌』の戸数・山地・田地・畑地を旧脇ヶ畑三ヶ字を比較すると（表8）のとおりとなる。

桃原の標高・地層調査表



（滋賀県湖東ダム建設事務所提供）

表9 桃原山林、畑その他所有面積(昭和48年調)

	山林面積	畑面積	他	宅地坪	田地
1	町反畝歩 8. 3. 8.00	反畝歩 3. 7. 19	反畝歩 1. 4. 15	坪 193.00	反畝歩
2	7. 5. 6.23	7.25	1. 3.07	209.00	
3	6. 2. 2.00	4. 7.11	2.11	230.00	
4	5. 1. 2.18	4. 7.28	1. 7.02	177.00	
5	4. 8. 6.00	4. 7.25	8.04	232.00	2. 1.23
6	3. 1. 1.28	2. 4.19	3. 0.22	0	
7	3. 0. 5.20	1. 5.28	3.19	136.00	
8	2. 5. 2.02	2. 3.09	3.24	0	
9	2. 3. 0.00	1. 2.12	0	75.34	
10	2. 2. 1.00				
11	1. 9. 0.18	3. 5.29	1. 1.23	128.84	5. 4.07
12	1. 9. 0.10	2. 7.08	9.07	137.00	
13	1. 4. 2.23	3. 6.01	2.28	110.00	
14	1. 3. 7.07	8.21	0	0	
15	1. 2. 8.05	5.01	5.28	0	
16	9. 0.16	3. 3.23	0	61.00	
17	8. 0.22	2. 7.12	19	86.25	
18	5. 9.06	9.04	5.09	156.00	
19	5. 2.23	2. 8.28	4.01	104.00	
20	4. 8.06	2. 7.04	1.26	145.00	
21	3. 8.08	3. 7.14	9.01	85.24	
22	3. 5.05	6. 2.04	2.12	101.00	
23	2. 7.11	3. 6.07	3.28	115.00	
24	1. 5.15	1. 4.23	7.08	91.08	
25	1. 5.03	3. 7.14	9.01	85.24	
26	1. 2.14	3. 5.24	2.05	230.00	
27	8.00	3. 3.03		50.00	6. 0.04
28	2.26	4. 3.24	1.09	120.00	
29	1.20	8.13	1. 2.19	0	2. 5.12
30	0	1. 1.11	0	0	
計	58. 1. 3.07	6. 8. 3.29	1. 6. 9.07		16. 1.16

表7 農業上産物、その他の産物

物名	播種地反別	産額	備考
米	町反畝歩 9. 2. 2	10石	
大麦	2. 5. 0. 0	20石	
小麦	4. 0. 0	3石2斗	
粟	2. 5.	2. 5	
大豆	5.	5.	
大葉		30斤	売先 彦根
煙草		4,000貫	売先 西京, 彦根
牛			
物名	製造家数	産額	備考
繭	3戸	5石	売先 鳥居本
製茶	高宮村人3戸	200斤	彦根
杉板	25戸	500坪	彦根, 高宮
麻	全村	3,000ヶ	高宮

畑は一戸当たりの面積には差はない。山林面積はとくに一戸当たりの面積は非常に少ない。山林面積はとまた共有林もない。桃原の山林および畑地その他の個人別所有面積は、

表8 桃原と旧藤ヶ畑村の山林、畑の比較表

字名	山林面積	1戸当たりの面積	畑総面積	1戸当たりの面積	田の総面積
桃原	町反畝歩 80. 6. 0.29	町反畝歩 1. 0. 5.25	町反畝歩 17. 2. 6.16	反畝歩 3. 3. 2	反畝歩 9. 6. 3 (1戸で所有)
保月	290. 2. 6.12	3. 8. 7.12	28. 2. 4. 8	3. 7. 2	2. 2
杉	77. 8. 8.24	4. 2. 9.15	6. 6. 7.29	4. 1.10	
五僧	126. 3. 9. 2	11. 4. 9. 1	2. 3. 6.22	2. 1.13	

表9のとおりで、山林面積の約四七割を四戸が所有し、次の六戸で三一割を持っていないことになる。山村でありながら、山の所有面積一町歩以下が半数以上で、山を持たない家もあった。それに比較して、畑地は差が少なく、平均されてきた。畑地

では牛蒡等の野菜を作っていた。

終戦までの生活は山持ちから雑木林の立木を買い割木にして彦根へ売りにいき、牛蒡を売った金で山代を払って生活をしていった。山の地主は雑木を売った金と牛蒡代で生活し、不足分は杉の木を売って生活していった。

桃原は比較的近くに山があり、割木や柴で運びやすかったことと、地質が炭焼窯に適さなかった関係上、製炭はなく炭は隣々畑村から購入していた。

桃原の牛蒡は有名で昔から京都の市場へ共同出荷され一、二月上旬、多賀駅から貨車で、後には自動車で京都へ運ばれていた。昭和三六年、作付面積五町九反で収穫高も七六トであった。お多賀牛蒡として、京都では正月には欠かせない料理の素材であった。その牛蒡も細いのが好まれ、太い物は安かった。一〇月下旬から一一月にかけて掘られ、六貫目を一束として、茅で巻かれ藤づるでくくられて、一束一束生産者の名前

を書いた焼き印のある木札がつけられ出荷された。値段も生産者によって違っていた。

お多賀牛蒡の特徴はどんなに太くても中にすの発生がなく、味がよく、しおれても水につければ元に戻ると自慢していた。値段も他の地方の立派なものより高かった。

タバコは明治には作られていたが、大正年代には作られていなかった。昭和三〇年ごろから盛んになった。それは政所地方にタバコの栽培があり桃原でも可能であるというので指導員を派遣してもらったからである。一四戸がタバコの栽培を行い、乾燥庫も六棟造られ、一時は牛蒡と肩を並べる勢いであった。

近畿農政局の調査では昭和三〇年の作付面積は三町三反、収穫高も約六・六トであった。

昭和三〇〜四〇年代が盛んであったが、その記録は残っていない。タバコの収穫の後に山田大根、ミヅナを栽培して農協を通じて出荷した。

タバコも牛蒡も連作はできなかった関係でタバコの後で牛蒡を作ったり、タバコを作っていない家の畑と交換して作付けがされていた。

牛蒡の後に大麦をまき、里芋を植えていた。里芋は土を上げ、牛蒡は下げるといふ生活の知恵として作付けされていた。

大正年代は非常に養蚕が盛んで、畑には桑が植えられ、この家でも蚕が飼われていた。隠居所にも蚕を飼うために畑が掘られていた。指導員も在住していた。

数人が製糸工場の社員となつて、繭の買いつけに従事したり、子供が小学校を卒業すると、製糸工場への就職を紹介する仕事をしていった。益・正月は工場から帰ってきた人、大阪の莫大小工場から帰ってきた人で大いににぎわった。

昭和五・六年の繭の暴落によって養蚕はすたれていった。沢山あった桑畑は掘られて、牛蒡畑にと変っていった。

工場へ働きにいった少年少女は真面目でよく働いた。辛抱強さもあり、工場では重宝がられた。当時工場では結核患者になると、村へ帰されてきた。結核は村中に蔓延して、結核で死んだ若者も多かった。製糸工場の悲劇はただ岡谷や岐阜だけの物語でなく、この山村にも野麦峠のような悲惨さはあった。上池林治郎校医の結核予防に対する熱意は忘れることができない。山村へき地の病人の治療に献身的に尽くされ、慈父のように慕われた医師であった（下巻八五八ページ多賀の先覚参照）。

茶の栽培面積も明治一一年の調査では三町歩にも及び、高宮の三戸が当たっていたと記されている。現在では山林になった所、山際などに茶の木を見かける程度で、老人に聞くと政所方面へ茶摘みに行った人は知っているが、茶園や製茶については知らないという。

世界農林業センサスによる農家戸数は昭和三五年（一九六〇）総世帯数三八のうち農家戸数二六、昭和

四〇年（一九六五）総世帯数三二のうち農家世帯数二六、昭和四五年（一九七〇）農家世帯二二で、専業一、農業主二〇、兼業主一〇となっていて、面積も〇・三〇以下二二、〇・三〇・五〇三、〇・五〇以上が六となっている。

昭和五〇年（一九七五）には農業世帯数が一一、専業三、農業主二、兼業主六となっている。

昭和五五年（一九八〇）農業世帯数五、専業三、農業主二、面積も〇・三〇以下四、〇・三〇・五〇一となっている。

昭和六〇年（一九八五）には農業世帯数は〇となり、畑を作る者がいなくなった。

注 昭和四〇年以前の統計は町村単位である。

『犬上郡誌』に桃原の特産物として渋柿しぶかきが書かれている（桃原ではニシトラ柿という）。一月上旬に赤く色づいた小さな枝が折れんばかりに鈴なりになっているのをちぎった。年末から冬にかけてさわして、彦根

へ売りにいった。小さいので「一口柿」といって、とても味がよく賞味された。

一般的にへき地や山村では集落内結婚が多いとされているが、桃原では明治二〇年ごろでも一五人が他所から結婚して来ている。終戦当時戸数四六戸のうち他所から嫁入りして来た人数は一九人もいた。

その原因を考えてみると、桃原は先にも述べたように山林面積が少ないうえに、炭が焼けないので山林の手入れ以外に山へ行くことが少なかった。主として女子は畑仕事で、人糞尿の肥料をやる仕事は男子に決まっていたので、女子は除草・取り入れ作業が主であった。牛糞掘りも男の仕事で女子は掘り上げられた牛糞を運ぶことになっていた。

里手を洗ったり、柿をさわしたりする準備は女子の仕事で、割木・薪の坂下までの運搬は女子も手伝うが、台八車やリヤカーを引いて町へ売りにいくことは一切なかった。一般の日用品も町へ物を売りに出た男



猿と猪の被害を防ぐための囲い

が買ってくるのが常であった。日常のおかずは畑で取れた作物が主であった。春の多賀祭り、秋のえびす講が女子にとって楽しみになっていた。

そんな関係で他所から嫁に来て、生活にあまり変化がなく、順応することができた。

昭和三五年一

〇月林道が着工され、三年後に完成をみた。それ以前大正七年に桃原車道の建設が進められ、桃原改修道路溝まで作られたが、水が出て、当時の技術では修理が不可能となり

利用するまでには至らなかった。

一・五詰の狭い坂道が唯一の交通路であった。この林道の完成によって、非常に便利になり、離村者も山の手入れ、墓参りなどに使用されている。

山村においては猿や猪による作物の被害が多く、それを防ぐのに苦勞している。

⑤ 過疎化後、桃原集落に実施された事業等

- ① 昭和五〇年五月、町道桃原本線の舗装整備の完成。
- ② 昭和五六年町道桃原向之倉線本線延長工事着工、昭和五八年五月に完成。
- ③ 昭和五六年関西電力瀬湖東南送電線工事に伴う共同アンテナ設置完成。
- ④ 昭和五七年一月第一防火水槽完成、第二川戸出、第三小黒組三ヶ所完成。昭和五八年簡易消防ポンプ車の購入。
- ⑤ 昭和五九年三月三十一日近江バス芹谷線運行休止。

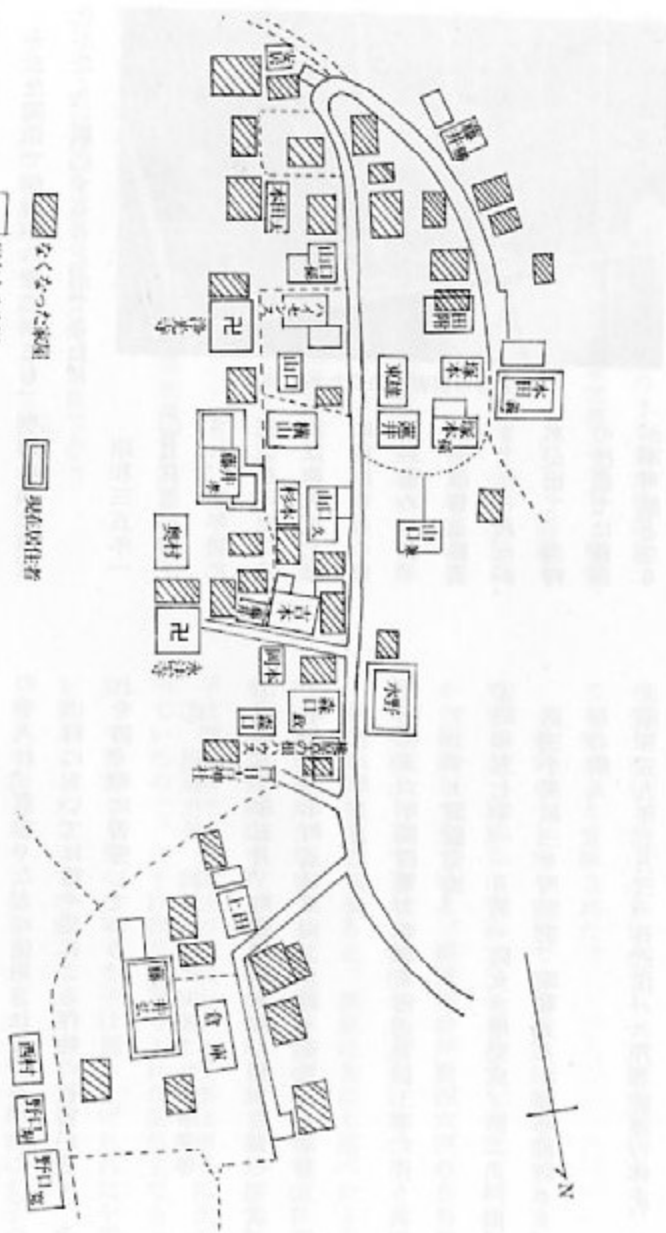


桃原草の根ハウス（公民館）

整備事業において桃原簡易給水施設が完成し、平成二年九月町から桃原集落に移管される。
⑧平成五年三月、多賀小学校芹谷分校が閉鎖される。

⑥昭和六二年五月一日
○日桃原
草の根ハウス竣工
（九五〇万円）。

⑦平成元年
度地区林構事業のうち生活環境施設



桃原村落要図（平成5年7月現在）

⑥ 桃原の現状と今後の問題点

1、修徳会

青年の修養目的と会員相互の親睦をはかることを目的とした会であった。桃原に在住する一六歳以上三〇歳までの男子をもって組織する。ただし女子は二五歳以上の未婚者、既婚者は決められた会費を負担することによって会の業務を免ずる。

会の事業・春秋の祭典・土用干しに出役し、日吉神社营造物・什器の保護に当たる。

その他区長、氏子総代の要請に応じて出勤する。

当字在住籍のない者でも六ヶ月を経過すれば必ず入会しなければならない。普請に出役することが認められないからである。修徳会に入会せず、当字の住民となる者は一定の金額を出さねばならない。

区長・評議員会で認定した者は、その認定された期間のみ、その義務を免ずる。

本規約の改正は毎年太子講において出席者の三分の二以上の賛成者を要する。

本規約に違反した者は当字住民としての資格を認めない。

大要以上のような規約によって実施されていたが、離村者が多くなり、時代の流れによって修徳会は自然消滅となった。

終戦後は人員も多く盛大で、余興・弁論大会・ハイキングなどが催されていた。

2、太子講

毎年二月二日、一戸代表者一人が出席し勤行が行われ、会計・事業報告・規約の審議・新年度の役員改選・事業計画などが決定されていた。

太子講は村の最大の決議機関であった。

現在は二月二〇日ごろの日曜日、桃原在住者四戸、多賀町在住者によって、桃原草の根ハウスにおいて実施されている。

平成二年度における太子講において決議された主な内容は次のとおりである。

① 村入費

④ 毎月一戸当たり現存戸数一、〇〇〇円、多賀町に居住する者も現存戸数とする。多賀町外に居住している者で当字に家を有する者は年額六、〇〇〇円とする。

⑤ 防火設備の維持に充てるため住居を当字に有する者は均等割にて徴収する。

⑥ 簡易給水施設の維持管理に充てるため送配水を受けた家は毎月三〇〇円を徴収する。

② 祭礼の経費

日吉神社の春秋の祭事と火祭り、正月の祭事、地藏盆の経費はその都度全戸より一戸当たり一、〇〇〇円を区長が徴収し、氏子総代に納入する。

③ 樹木の伐採について

当字に土地を所有し、樹木を伐採し、被害を与えた

場合は被害箇所を原形どおり復旧し、問題を起こさないようにする。

④ 村普請の義務

① 女世帯については女で認める。

② 男世帯については病気のときは女にて認める。

③ 同居者は不参料を免除する。ただし、献身的に奉仕する。

④ 暦年七〇歳以上の世帯については不在の場合出役を免す。

⑤ 道路普請について

春・夏・秋と日を決めて実施する。なお事情により臨時普請を行うこともある。

⑥ 牛券委員は農業組合長が兼務する。

京都中央市場の要望により改良された細物のみ共同販売する。

⑦ その他

④ 植樹に当たっては従来どおりの協議事項を厳守す

ること。新たに植樹する場合は隣接界より二メートルして植樹する。道路に面する植樹は除草車に障害を与えぬよう道路幅員より二メートル控える。

⑤ 祭礼は氏子総代の指示によって一戸一人奉仕すること。

3、今後の問題点

現在村の居住戸数四戸・人口一〇人、多賀町内居住戸数五戸にすぎない。在住者も高齢化している。現在は桃原に幼少時から住んでいた者が多いので愛村観念があるが、代が替ってくると、村に対する考え方も変化してくる。

また自分の植林した山には愛着を感じるが、山の堺の明確さも薄くなり、問題が起こりやすくなる。とくに脇々畑村のように共同林がなく全部個人所有林である関係上、協力が欠けやすい点も問題であろう。

調査表にも現れているように、村に居住している人、村を守ってくれる人々に感謝しているとあるが、やが

表10-2 旧芹谷の人口・戸数の変化(その2)

集 落 名	昭和30年 (1955)		昭和35年 (1960)		昭和40年 (1965)		昭和45年 (1970)		昭和49年 (1974)		
	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	
雲 仙	合 烟 谷	57	11	52	13	52	12	53	12	45	12
	落 今 入	49	13	39	10	32	8	19	7	12	5
	小 計	110	23	104	21	96	21	95	21	80	20
河 内	山 女 原	71	16	89	18	76	14	66	15	49	13
	宮 前 村	61	13	64	14	67	15	66	14	53	13
	中 村	58	13	47	12	37	12	36	12	28	11
	下 村	54	11	46	11	45	10	41	10	43	10
	小 計	244	53	246	55	215	51	209	51	130	47
甲 頭 倉	92	21	86	22	60	18	37	14	23	11	
屏 風	52	11	49	12	40	12	30	11	27	10	
後 谷	74	20	75	20	57	14	23	9	9	5	
向 之 倉	57	16	60	14	43	12	13	9	7	5	
桃 原	163	39	156	38	107	31	84	20	41	10	
水 谷	下 水 谷	53	12	60	13	66	14	58	13	54	13
	上 水 谷	95	19	92	18	91	18	86	18	83	18
	小 計	148	31	152	31	157	32	144	31	137	31
旧 芹 谷 村	1,046	238	1,019	236	859	211	707	185	554	156	

資料：1955年～1965年 国勢調査 1970年～1974年 住民票（12月末）

表10-1 旧芹谷の人口・戸数(その1)

集 落 名	大正元年 (1912)		大正9年 (1920)	
	人口	戸数	人口	戸数
雲 仙	合 烟 谷			
	落 今 入			
	小 計	299	57	256
河 内	山 女 原			
	宮 前 村			
	中 村			
	下 村			
	小 計	315	57	246
甲 頭 倉	126	24	97	23
屏 風	62	14	57	11
後 谷	128	18	106	18
向 之 倉	90	15	66	15
桃 原	257	37	224	40
水 谷	下 水 谷			
	上 水 谷			
	小 計	174	32	152
合 計	1,451	254	1,202	252

大正時代は戸数二百五十数戸、一、四〇〇〜一、二

⑦ 旧芹谷村の戸数・人口の変遷

てこの気持ち薄れる時代がやってくるであろう。
また、現在村にある家屋が朽ちて倒壊すること必至である。そう考えると一抹のわびしさを感じずにはいられない。

〇〇人であった。
昭和三〇年・昭和三五年・昭和四〇年の国勢調査、その後の住民票などによると表10のとおりである。
桃原調査と同じように昭和四〇年ごろから減少していった。燃料革命に加えて野沢セメント後谷採石掘所の閉鎖が昭和三九年一月に行われた。人員整理や配置転換によって、職を失い、彦根へ出なくてはならな

表10-3 旧芹谷村の人口・戸数

集 落 名	昭和50年 (1975)		昭和56年 (1981)		昭和61年 (1986)		平成3年 (1991)		平成5年 (1993)		
	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	
靈 仙	合	40	11	26	10	17	8	10	7	8	6
	落	12	5	5	4	3	3	1	1	1	1
	今 入	80	20	56	18	19	9	11	5	9	4
小 計	132	36	87	32	39	20	22	13	18	11	
河 内	山	52	15	43	11	22	7	21	8	19	8
	女	56	14	52	14	39	14	24	12	21	11
	宮	32	11	18	7	12	8	8	7	8	7
	中	37	10	37	11	25	10	24	10	17	8
下	177	50	150	43	98	39	77	37	65	34	
小 計	23	11	19	11	16	11	13	9	12	8	
甲 頭 倉	28	11	15	9	10	7	9	7	8	6	
屏 風	11	5	8	4	5	2	4	2	3	2	
後 谷	7	5	2	2	1	1	1	1	1	1	
向 之 倉	38	11	12	8	12	5	11	5	11	5	
桃 原	54	13	49	13	34	10	29	11	27	11	
水 谷	下	83	18	59	16	60	16	55	16	53	16
	上	137	31	108	29	94	26	84	27	80	27
小 計	553	160	401	138	275	111	221	101	198	94	
旧 芹 谷 村											

くなった。

次に挙げられるのは教育問題である。高校進学率の増加によって、通学の不便、積雪による通学不可能により転出を余儀なくされた。

かろうじて表10のように平地で比較的交通の便利な水谷・河内・今畑を除く靈仙の人口の流出は緩やかであった。なかでも水田を持つ水谷は戸数・人口の激減がなかったといえる。

平成五年三月多賀小学校芹谷分校は多賀小木校に吸収され閉鎖された。

12 旧町村の財政規模

はじめに 明治一八年(一八八五)、多賀村ほか四ヶ村、久徳村ほか六ヶ村、桃原村ほか

七ヶ村、保月村ほか二ヶ村、佐目村ほか五ヶ村、川相村ほか八ヶ村の六連合戸長役場制であった多賀地域は、明治二一年(一八八八)四月に公布され同二二年四月に施行された町村制によって、多賀村・久徳村・芹谷村・脇ヶ畑村・大滝村の五ヶ村が発足し、それぞれ独立した自治体としての歩みを始めた。

昭和三〇年(一九五五)、新町になるまでの旧町村財政の概要は、町史下巻三六九ページに記しているが、財政規模の内容については触れていないので、ここに追記する。

公財政の 五ヶ村の財政は、各村の当時の人口数規模の基礎と村の面積、産業の状況によって、内

容には特異性があるが、町村制が施行された直後の明治二三年の人口および戸数は次表のようであった。

多賀村	七二五戸	三、八二一人
久徳村	四四〇〃	二、一七〇〃
芹谷村	二九〇〃	一、五八七〃
大滝村	六六四〃	三、一一四〃
協ヶ畑村	九六〃	四七二〃

各村の歳入・出の金額は、その資料に欠けるので、昭和四五年発行された『滋賀県市町村沿革史』を参考にその概要を記してみよう。

各村の 多賀村 明治三四年一万円あまり、

財政規模 大正六、七年一万六、〇〇〇円台、以

後昭和初年まで二、三万円台、年により臨時的支出のため五、六万円と額が増えた。

税収は、明治三四年は歳入総額の六六割で、雑収入が二九割を占めた。

大正中期には税収入が七〇〃八〇割に達しその他の

収入はごくわずかであった。

しかし大正末期以降は、国庫下渡金や寄付金が多くなり、また昭和三、五年には村債が募集され、翌年度への繰越金が多額になって、税収入の比率は低くなり、四〇〃五〇割の年が多くなった。

歳出では、明治三四年には教育費が、久徳村と学校組合で運営されていたので計上されていないが、それに代わる学校組合負担金が歳入総額の三六割を占めており、当時は各村ともに学校運営のため、多額の村費を要したことがうかがえる。

大正中期には、教育費が五〇割前後を占めて、役場費一〇〃二〇割、土木費六一〃一六割であるので、職員数も少なく、建設的な事業は強く進めることができなかったであろう。

この多賀村の例は他村にもいえることであった。

その後昭和一〇年ごろまでは著しい変化はなく、ただ大正一四、昭和三、五、八、一〇年に臨時の大きな

支出がみられた。

久徳村 明治三四年六、九六〇円、大正中期一万円台、その後昭和年代前半まで二万円台で、昭和七、九年には三万円以上に達した。

税収は、大正中期税収が六〇割以上を占め、これを雑収入・寄付金などで補っていた。

大正末期以降国庫下渡金がこれに代わり、昭和八、一〇年県補助金も増加した。

しかし、なお不足する部分は依然雑収入や寄付金に依存し、昭和七年以降一〇年までは公債も募集されたので、税収入の比率は漸次低下し、昭和七、一〇年には三〇割台になった。

税収比率の低下は、村財政の中で住民の直接負担が軽減されたことになる。

歳出では、大正中期教育費三〇〃四五割、役場費一六〃一八割、雑支出は役場費と同率で、土木費がこれに続いた。

昭和期もほぼ同じで、八年以降雑支出とその他の支出が増加し、同七年には寄付金が多かった。

芹谷村 明治三四年二、四八七円、以後大正七、昭和七年には二万円台、昭和一〇年には四万円を超えた。大正中期税収は一定せず、寄付金や雑収入より少ない年もあった。

大正末期以降昭和六年まで四〇〃六〇割となり安定したが、このころから国庫支出金が増加し、また県補助金も増加した。

公債の発行は昭和七、八年のみでその額は少ない。歳出では、同じく教育費がもっとも多く、大正中期一五〃五〇割、昭和期四〇〃六〇割、次いで役場費は、大正から昭和にかけて二〇割台から一〇割台に落ちた。

大滝村 明治三四年七、〇四五円、大正末期変動が激しくなって二、一〇万円の間を上下し、昭和一〇年代四、五万円に落ち着いた。

年度別分布調査計画範囲図は本項末尾のとおりである。

平成元年度 以上のような計画の中、平成元年度分のまとめが、その一つとして平野部を中心に一応まとまった。

この地域の遺跡を分類してみると、遺物の散布地一六、古墳七、城跡八、寺跡四、窯跡二、洞窟三の計四〇となっている。なお、遺物の散布地は遺物をまきちらした所をいう。

次に、遺跡成立の時代は縄文期から中世に至っているが、不明の所もある。

これを時代別に並べると以下のようになる。

縄文以前 一 縄文 一 縄文と中世 一
古墳時代 六 古墳と中世 四 白鳳 一
奈良時代 三 奈良と中世 七 平安 二
中世 八 室町時代 一 不明 五
中世が一番多く次に奈良から中世までが多く、古墳

時代がこれに次いでいる。

遺物の 遺物散布地一六を瞥見してみよう。

散布地 **木曾遺跡** その遺跡の所在地は木曾と久徳両字にまたがり、古墳時代から中世に至る遺物が散布している。これは平成元年度の分布調査によって確認された。

新田遺跡 その所在地は中川原で、中世の遺跡の小範囲の散布地である。平成元年の調査で確認された。

川原遺跡 その所在地は土田の芹川沿岸の相当広い地域である。これも中世の遺物が散布していることが、同年の調査で明らかになった。

土田遺跡 その所在地は土田の西部一帯で広い範囲である。古墳時代から中世に至る遺跡の散布地で、平成元年の調査によって確認されている。

猿木遺跡 その所在地は猿木一帯で、キリンビール滋賀工場の西北地域である。これも平成元年の調査によって、奈良時代から中世の遺物の散布地であること

が確認された。

敏満寺西遺跡 その所在地は敏満寺西部一帯で、遺跡中最大の地域であって、水沼荘遺跡も含まれている。古く水沼荘といわれた荘域で奈良時代から中世に至る遺物の散布地となっている。この遺跡については町史にも詳述されているが、平成元年の分布調査で再確認された。

大門池南遺跡 その所在地は敏満寺大門池南部墓地付近である。時代は明らかでないが戦時中に松根油採取のため掘った場所から、屈葬人骨と隆平永宝八〇枚が出土したことがある。

守野遺跡 その所在地は敏満寺原田地区と守野一帯の相当広い地域である。奈良時代から中世に至る遺物の散布地であることが、平成元年の調査で明らかになった。

四手遺跡 その所在地は大岡、四手の両字領にまたがっている。古墳時代から中世に至る間の遺物の散布

地となっている。これは平成元年の調査で確認された

が、最近の造成事業でそれよりはるかに古い古琵琶湖層が確認されて耳目を驚かせている。

滝ヶ原遺跡 その所在地は藤瀬の西北で、奈良時代から中世の遺物の散布地である。

富之尾遺跡 その所在地は富之尾で、横に細長い地域である。奈良時代から中世までの遺物が散布している。昭和六三年圃場整備で調査された。町史に詳述されている。

堂ノ下遺跡 その所在地は富之尾で、富之尾遺跡の南にある。奈良時代から中世に至る遺物の散布地で、平成元年の調査で確認された。

梨ノ木西遺跡 その所在地は富之尾梨ノ木で平安時代の墓跡ともいわれ、昭和四五年緑釉陶器(葎骨器)が出土している。

梨ノ木東遺跡 は、所在地・時代など西遺跡と同じである。

杉遺跡 その所在地は桃原で杉坂峠に近い山頂に立地している。時代は不明ながら経塚として有名である。

久徳遺跡 その所在地は久徳、一円の両字にまたがる細長いかなり広い地域である。古墳時代から中世にわたる遺物の散布地であり、平成元年の分布調査により確認された。

古墳 古墳七は町史で明らかにしてあるの
で、一瞥にとどめたいと思う。

木曾古墳 その所在地は木曾で木曾遺跡の真ん中にある。古墳時代に平地に築造された円墳で、須臾器などの出土があった。

一円古墳 その所在地は一円で、古墳時代に一円東部の山腹に築造された円墳である。現状は山林になっている。

大塚古墳 その所在地は敏満寺大塚である。古墳時代に築造された大上郡に珍しい前方後円墳で、横穴式

石室も確認されている。

大岡遺跡 その所在地は大岡でかなり広い集落古墳で、縄文時代から中世に至る長い時代の複合遺跡である。平成元年、圃場整備の事前調査で再確認された。

石塚古墳群 その所在地は大岡で、大岡遺跡内にある。古墳時代の円墳数基が平成元年の圃場整備の調査で検出された。

大岡古墳群 その所在地は大岡集落東部の山腹にある一大古墳群で、円墳一三基を数える。その中の一基は横穴式石室が露呈しており町指定の文化財になっている。

檜崎古墳群 その所在地は檜崎で平地に構築された古墳群で、円墳数基で構成されている。うち一基は町の文化財に指定されている。

城跡 城跡七を概観しよう。

小林遺跡 木曾の丘陵地に所在する中世の城跡で、平成元年の分布調査で確認されている。

る。中世城郭の研究家長谷川銀蔵氏の实地踏査にかか
る遺跡見取図もある。

久徳城跡 その所在地は久徳集落で中世の平地城跡
で、詳細は町史中世城郭の項にある。

大賀城跡 その所在地は大岡の丘陵地で、中世の城跡
であることは平成元年の調査で判明した。

倉谷遺跡 その所在地は敏満寺の青竜山の尾根つづ
きの丘陵地である。中世の城跡であることは相当古く
から判明していて、さきの長谷川氏の見取図や研究物
もあり、これらが平成元年の調査で再確認された。

勝楽寺山城跡 その所在地は檜崎で、室町時代の高
築豊後守の城跡で山頂には石垣も残っている。

殿山遺跡 その所在地は富之尾の山麓で、奈良時代
から中世に及ぶ時代の城跡で、平成元年の圃場整備の
調査で確認された。

高室山城跡 その所在地は保月で高室山の山頂一帯
で、中世の城跡である。

寺跡 次は寺跡四を瞥見しよう。

一円庵寺 その所在地は一円、桃原
神社付近の山麓である。時代は不明ながら古い寺院跡
で伝承地である。

敏満寺遺跡 その所在地は敏満寺青竜山丘陵一帯で
広大な地域にわたる。奈良時代から中世中期に隆盛を極
めた大寺院跡で、仁王門、金堂などの跡も指摘されて
いる。昭和六一、二年再度の発掘調査によって、寺院
中に入ったという軍事施設も確認された。詳細は町史
により明らかである。

レイソウ寺遺跡 その所在地は富之尾小字レイソ
ウ。時代は不明である。南嶺和尚の開基したという靈
驗寺に擬する説もあるが、それより古いと思われる。
靈聡寺と書く人もいるが、戸籍台帳にはレイソウと仮
名を使っている。

古屋寺跡 その所在地は富之尾梨ノ木である。この
辺一帯の丘陵からはすでに町史で詳述したように、木



分布調査所在地

番号	名 称	所在地	番号	名 称	所在地
1	小林遺跡	木曾	21	四手遺跡	大岡四手
2	木曾	木曾久徳	22	倉谷	敏満寺
3	木曾	木曾	23	籠城山	〃
4	新田	中川原	24	檜崎古墳群	檜崎
5	久徳城跡	久徳	25	檜崎東遺跡	〃
6	久徳遺跡	久徳一円	26	勝楽寺山城跡	〃
7	一円廃寺	一円	27	滝ヶ原遺跡	藤瀬
8	一円古墳	〃	28	レイソウ寺	富之尾
9	川原遺跡	土田	29	富之尾	〃
10	土田	〃	30	堂ノ下	〃
11	猿木	猿木	31	殿山	〃
12	敏満寺西	敏満寺	32	長尾窯	〃
13	敏満寺	〃	33	梨ノ木西	梨ノ木
14	大塚	〃	34	梨ノ木東	〃
15	大門南	〃	35	古屋寺	〃
16	守野	守野	36	佐目の風穴	佐目
17	大岡	大岡	37	深泥ヶ池洞窟	〃
18	石塚古墳群	〃	38	高室山城跡	保月
19	大賀城跡	〃	39	杉遺跡	桃園
20	大岡古墳群	〃	40	河内の風穴	河内

番号	名 称	所在地	種 類	時 代	立 地	現 状	備 考
16	守野遺跡	守野	散布地	奈良・中世	平地	畑・水田	平成元年度分布調査で確認
15	大門池南遺跡	敏満寺	墓跡	不明	平地	墓地	銅銭
14	大塚古墳	敏満寺	古墳	古墳	平地	水田	前方後円墳・横穴式石室
13	敏満寺西遺跡	敏満寺	寺院跡	奈良・中世	丘陵	山林・畑	仁王門跡・金堂跡・古銭・軒瓦・土器
12	敏満寺遺跡	敏満寺	散布地	奈良・中世	平地	畑・水田	平成元年度分布調査で確認
11	猿木遺跡	猿木	散布地	奈良・中世	平地	水田	水沼遺跡を含む・平成元年度分布調査で確認
10	土田遺跡	土田	散布地	古墳・中世	平地	水田	平成元年度分布調査で確認
9	川原遺跡	土田	散布地	中世	平地	水田	平成元年度分布調査で確認
8	一円古墳	一円	古墳	古墳	山腹	山林	円墳
7	一円庵寺	一円	寺院跡	不明	山	山林	伝承地
6	久徳遺跡	久徳・一円	散布地	古墳・中世	平地	水田	平成元年度分布調査で確認
5	久徳城跡	久徳	城跡	中世	平地	集落	平成元年度分布調査で確認
4	新田遺跡	中川原	散布地	中世	平地	水田	平成元年度分布調査で確認
3	木曾古墳	木曾	古墳	古墳	平地	水田	円墳・須恵器
2	木曾遺跡	木曾・久徳	散布地	古墳・中世	平地	水田	平成元年度分布調査で確認
1	小林遺跡	木曾	城跡	中世	丘陵	山林	平成元年度分布調査で確認

平成元年度 分布調査結果

炭郭・緑釉陶器・円面硯などの出土品が続出しているところから、相当権威ある寺院であったのではないかとと思われる。

次は窯跡二つを検討してみよう。

窯 跡

榑崎東遺跡 その所在地は榑崎で、

集落の東部大上川沿いである。白鳳時代——白鳳は天武天皇の時の私年号で、大化の改新後平城京へ遷都するまでの六〇余年間をいう——に築かれた窯跡といわれ、軒瓦などが出土している。

長尾窯跡

その所在地は富之尾の山麓で、奈良時代の窯跡で、平成元年の分布調査で、須恵器窯二基以上あったことが確認されている。

洞 窟

最後に三つの洞窟遺跡をみよう。

佐目の風穴

その所在地は佐目集落の東部大上川を隔てた山腹で、町史で詳述した縄文土器の出土した石灰洞窟である。

深泥ヶ池の洞窟

その所在地は佐目で、佐目洞窟の

東の山腹である。ここも町史で詳細に報告した奈良時代須恵器数点が出土した洞窟である。ここはたびたび調査されているが、平成元年の調査によって再確認された。

河内の風穴

その所在地は河内宮前で、県指定の文化財である。今までは五〇〇坪ほどのいわゆる観光洞とされていたが、この洞窟は昭和六二年全国洞窟大会の事前調査で、三、三二三坪が測定されて、全国屈指の大洞窟として新しい脚光をあびるようになった。

以上が現在までに明らかにされたその一・平野部の遺跡の概要である。今後計画に基づいて、さらに芹川沿線、佐目・大君ヶ畑一带、大上川沿線の分布調査が完了して木町における文化財の細密な報告ができるのもそう遠くはないと思う。

番号	名称	所在地	種類	時代	立地	現状	備考
33	梨ノ木西遺跡	梨ノ木	墓跡	平	丘陵	畑地	古銭・蔵骨器
32	長尾窯跡	富之尾	窯跡	奈良	山地	畑地	須惠器窯二基以上・平成元年度分布調査で確認
31	殿山遺跡	富之尾	窯跡	奈良・中世	水田	畑地	平成元年度分布調査で確認
30	堂ノ下遺跡	富之尾	散布地	奈良・中世	水田	畑地	昭和六三年圃場整備で調査
29	富之尾遺跡	富之尾	散布地	奈良・中世	水田	畑地	平成元年度分布調査で確認
28	レイソウ寺遺跡	富之尾	寺院跡	不明	畑地	畑地	
27	滝ヶ原遺跡	藤瀬	散布地	奈良・中世	水田	畑地	高筑豊後守の城築・石垣
26	勝楽寺山城跡	橋崎	城跡	室町	山地	畑地	瓦窯跡・軒瓦
25	橋崎東遺跡	橋崎	窯跡	白鳳	山地	畑地	円墳数基・町指定文化財
24	橋崎古墳群	橋崎	古墳群	古墳	山地	畑地	平成元年度分布調査で確認
23	籠城山遺跡	籠満寺	城跡	中世	山地	畑地	平成元年度分布調査で確認
22	倉谷遺跡	籠満寺	城跡	中世	山地	畑地	平成元年度分布調査で確認
21	四手遺跡	大岡・四手	散布地	古墳・中世	山地	畑地	円墳一三基・横穴式石室・須惠器
20	大岡古墳群	大岡	古墳群	古墳	山地	畑地	平成元年度分布調査で確認
19	大賀城跡	大岡	城跡	中世	丘陵	水田	円墳数基(大岡遺跡内)
18	石塚古墳群	大岡	古墳群	古墳	平地	水田	平成元年度圃場整備で調査
17	大岡遺跡	大岡	集落古墳	縄文・中世	平地	水田	

14 胡宮神社の文化財

平成四年度の事業として県教育委員会が、胡宮神社・大日堂の仏像や古文書等について詳細な調査を実施したが、このほどその報告書の一部を入手したので、それを所載する。

(1) 彫刻

1、銅造大日如来座像一軀 銅造・鍍金 総高二四・

34	梨ノ木東遺跡	梨ノ木	墓跡	平	丘陵	畑地	蔵骨器
35	古屋寺跡	梨ノ木	寺院跡	不明	丘陵	畑地	伝承地
36	佐目の風穴	佐目	窟	縄文	山地	畑地	石匠洞窟・縄文土器
37	深泥ヶ池の洞窟	佐目	窟	奈良	山地	畑地	須惠器数点・平成元年度分布調査で確認
38	高室山城跡	保月	跡	中世	山地	畑地	
39	杉遣跡	桃原	跡	不明	山地	畑地	
40	河内の風穴	河内	窟		山地	畑地	県指定文化財

四尊 像高一三・七寸 鎌倉時代(一三世紀前半)

頭部から膝前部までを一鑄として、両肩から先を別鑄とする金剛界大日如来の小像である。きわめて小さな金銅仏であるが、奈良仏師の運慶派の介在が想定される本格的な像で、県内に現存する鎌倉時代の金銅仏中、屈指の優秀作である。

2、木造大日如来座像一軀 木造・古色・彫眼 像高

七六・二寸 江戸時代・宝永七年(一七一〇)

寄木造になる金剛界大日如来像で、その像内に前記銅造大日如来座像を納入する、いわゆる「さや仏」で

ある。像内や底板に長文の墨書があり、木像造立の経緯が判明し興味深い。

3、木造地藏菩薩半迦像一軀 木造・古色・玉眼 像高五〇・八寸 鎌倉時代（一二世紀末と一三世紀初期）

ヒノキ材の割拵造になる地藏菩薩像で、鎌倉時代の新技法である玉眼（目をくりぬいて水晶をはめこむ）を用いている。平安後期の穏やかな作風から、鎌倉時代の新しいスタイルに移ろうとする時期の作で、県内における玉眼の使用例として、屈指の古さを表している。正徳二年（一七二二）に修理されている。

4、木造聖観音立像一軀 木造・古色・彫眼 像高九七・七寸 平安後期（一二世紀）

火災と水害にあったようで、保存状態は良くないが、平安後期の造像とみられる。両肘までを一材から造り内割りしない三尺の聖観音像で本格的な表現になるが、損傷が惜しまれる。天保六年（一八三五）に修

理されている。

5、木造僧形座像三軀 木造・古色・素木・彫眼 像高、①二九・三寸 ②二三・四寸 ③二一・六寸 平安鎌倉時代（一二～一四世紀）

神像かと思われる三軀の像であるが、それぞれ制作の時期を異にする。いずれも全身を一材から丸彫りにし、一・三像は立体的に表現し、二像は半肉彫とする。制作は一像が古く一二世紀、三像がそれに次いで一二～一三世紀、二像が一四世紀辺りの作であろう。

6、銅造毘沙門天立像一軀 銅造・鍍金 総高一・五寸 像高一・〇寸 鎌倉時代（一三世紀）

右手に幡、左手に宝塔を持ち、岩座の上に立つ毘沙門天像で、像の全身を一鑄し鍍金する。小像ではあるが、細身に造られている全身などバランスもよく、鎌倉時代の特色をよく表している。

その他に懸仏の銅造如来像（銅造・鍍金 像高一・三寸 鎌倉時代）があり、懸仏らしいその他木造

菩薩座像がある。木造・漆箔 像高一五・三寸 鎌倉時代。

（以上 県立近代美術館高梨純治主査報告）

(2) 絵画典籍など

胡宮神社にはこのほか絵画・典籍などが多数所蔵されているが、まだ未整理である。これを絵画・典籍別に整理すると次のようである。

(イ) 絵画 一〇点

番号	名	称	員数	法量タテ×ヨコ(cm)	時代
1	紙本着色涅槃図		一副	二二一・九×一四〇・〇	江戸後期
2	紙本着色真言八祖像		一	一七一・五×七五・四	〃
3	紙本着色両界種子マンドラ		二	一〇四・九×七九・五	〃
4	本紙着色十二天画像		六	八九・〇×五二・五	〃
5	紙本墨画文珠像		一	八三・三×二八・三	〃
6	紙本着色天台智者大師像		一	九〇・二×三九・八	〃
7	紙本着色両界種子マンドラ図		二	一四八・四×一三八・六	〃
8	絹本着色旭日鶴松之図		一	一二八・二×五一・一	〃
9	絹本着色天満宮尊影図		一	六六・七×二七・五	〃
10	絹本薬師三尊像		二二	三〇・六×四三・八	鎌倉時代

番号	名	員数	法量タテ×ヨコ(cm)	時代
19	天明五年右條観音開帳ノ覚	一冊	二八・三×二〇・一	享保三・一・二・下
20	明和六年多賀安養寺ヨリ像移転届・覚	一冊	二七・〇×一九・九	文化元・六
21	胡宮社鳥居再建之件覚書	一冊	二八・三×二〇・二	寛政七・九
22	胡宮社鳥居再建之件	一冊	二八・五×二〇・一	文化元・七・二〇
23	葵御紋付火灯ノ件留書	一冊	二八・五×二〇・三	江戸後期
24	多賀社修正会ニ付東叡山下知状	一冊	二七・八×二〇・七	寛政九・一〇・一八
25	多賀社再建地突ニ付覚書	一冊	二八・〇×一九・九	文化元・一一・下
26	磐海弟子当院へ移転ニ付寺証写	一冊	二八・八×一七・三	享保三・八・一二
27、28	四ノ屋鳥居前棒杭再建ノ覚	二冊	二八・六×二〇・五	文化元・八・一四 元・八・一四
34	婦命無量寿神秘伝鈔全	一冊	二四・五×一七・三	享保元・四・九
35	御神拜之式	一冊	一四・二×二〇・〇	江戸後期
36	多賀胡宮滝ノ宮修正会ノ一通り	一冊	一四・〇×二〇・〇	〃
37	年中行事帳	一冊	二八・六×一九・五	享保一六・三
38	胡宮年中行事記	一冊	二四・五×一六・三	明和四・四
39	胡宮年中行事	一冊	二七・五×一九・四	天保五
40	胡宮社年中行事	一冊	二五・〇×一七・〇	明治五
41	作法次第(?)断簡	一冊		応永年間(?)

(4) 典籍 四一点

番号	名	員数	法量タテ×ヨコ(cm)	時代
1	青龍山敏満寺旧事記	一冊	二五・一×一七・五	享保元・七・下
2	青龍山敏満寺胡宮福寿院由来記	二冊	二八・二×二〇・三	寛政九・一〇・中
3	青龍山敏満寺胡宮福寿院由来	一冊	三〇・〇×二二・四	江戸後期
4	胡宮大明神大日堂青龍山敏満寺福寿院由来記	一冊	二七・〇×二〇・〇	明治元・七
5	口上覚書(仙永筆)	一冊	二九・五×二一・五	寛政五・二・八
6	胡宮旧事記	一冊	二八・五×二〇・三	江戸中期
7	多賀胡宮神社大日堂境内建前	一冊	二七・六×一九・七	江戸後期
8	胡宮屋根松皮葺仕換之記	一冊	二四・五×一七・〇	慶応元・七
9	諸事手扣	一冊	二七・六×一四・〇	文久二・春
10	北野聖廟天満宮御略伝	一冊	二四・九×一六・七	明治八・七
11	口上覚書	一冊	二五・一×一七・三	江戸後期
12	胡宮諸記録(永禄写)	一冊	二六・八×二〇・〇	文化元・五・下
13、14	京都靈山ニ出開帳之日記	二冊	二九・五×二〇・五	文化元
15	京都靈山正法ニ出開帳之願書写	一冊	二九・四×二〇・三	文化元
16	京都靈山ニ出開帳日記四五	一冊	二九・一×二〇・二	文化二
17、18	京都靈山之序日延ノ件	二冊	二九・五×二〇・六	文化元

(イ)古文書

(年月日法量のほか、書名未詳につき略)

(ロ)書跡 四点

番号	名	員数	法量タテ×ヨコ(cm)	時	代
1	慈性書状	一通	三五・七×五六・七	江戸前期	
2	慈性和歌懐紙	一	二八・五×四二・八	〃	
3	東嶽書跡	〃	九八・三×二八・一	江戸期	
4	慈性和歌懐紙	〃	三〇・六×四三・八	江戸前期	

以上は琵琶湖文化館の土居道弘主査の報告であるが、広般多岐のため個々の解説にまでは及ばなかった。一瞥しただけでも貴重なものが目につく。今後の詳細な報告に期待する。

15 高宮にある大社一の鳥居

彦根市高宮町の中央、旧中山道沿いにある大鳥居は、多賀大社一の鳥居ともいう。

この鳥居は、昭和四〇年八月九日に、県指定文化財(建造物)になっている。

町史下巻三四〇ページに概要を記しているが、さら

に現地調査のうえ詳述する。

『多賀大社寛永造宮記』、文政四年(一八二二)に、多賀大社別当慈通が『慈

性日記』から書写したものによって、その概要を知ることが出来る。

別当慈性(上巻六二六ページ参照)は、寛永元年(一六二四)から同一〇年にいたる一〇年間にわたり、幕府にはたらきかけて、老朽化した多賀大社のすべての建造物の改築大造営と、社領の加増を計画し、ただならぬ努力を重ねた。

その結果、寛永一〇年(一六三三)七月二二日、ついに幕府の認めるところとなり、後世に伝えられる寛永の大造営が始められることになった。

幕府は、同年八月八日、多賀作事奉行に、小堀九郎兵衛、代官に、岡田将監善政を任命し、翌一二年三月一七日、市橋下総守長政が作事奉行として、多賀に派遣され、造営の大事業を進める準備を整えた。

ただちに調査が始められたのであろう。寛永一一年

四月一六日の『慈性日記』には、高宮の大鳥居は、七、八尺(二・一二×二・四二尺)ほどの朽ちた柱が一本残り、片方がなかった、近くにいた八〇代半ばの老婦人に聞くと、柱と柱の間が五間(約九尺)であったというので、二、三軒付近の家を取り除けて掘ってみると、残りの一本の柱根が出てきた。まさに老婦人のいったとおりであった。

翌一二年(一六三五)八月六日、以前は木であった鳥居を、石造りに変更するようにと老中へ願い出たところ、石でよろしいと老中からの下総殿・九良兵衛へ書付が下った。

そのとき、本社前のそり橋と寺前の橋も同様であったと記しているので、木造で半壊の鳥居であったが、石造りにされたのだろう。

鳥居の施工についての記録はないが、寛永一五年(一六三八)九月二二日、御造営のすべてが完成したので、総供養が行われた。

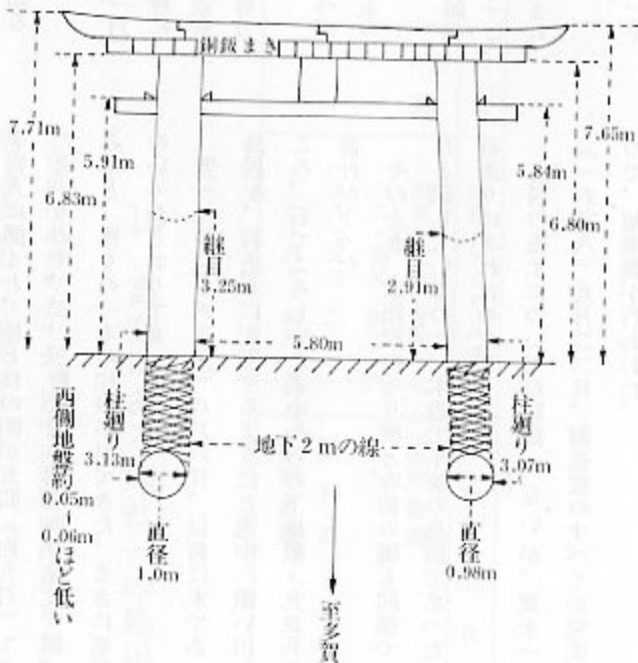
運動を始めてから一五年、着工から五年目に本社および末社のすべてが完了し、総事業費は一二万両であると、『多賀大社神殿並由緒大略』には記されているが、一説には三〇万両であったと『多賀神社史』（昭和八年発行）に記されている。鳥居の建設費も当然含めてであろう。

鳥居の構造

昭和八年五月発行の『多賀神社史』には、次のようにある。

一ノ鳥居

旧中山道の沿道にある。寛永の大造営の際建立、石造、明神型、柱の巾二七尺（八・一八尺）、高さ三五・五尺（一〇・七五尺）、柱径三・八尺（一・一五尺）、扁額（横長の額）は青蓮院門跡尊純法親王の染筆という。ここから社頭に至るまで、たんたんとした参道二八町（三・〇五四尺）、一町（一〇九尺）毎に灯ろうがあり、往古の表参道であった。



高宮一の鳥居実測図（平成5年1月17日）

〔実測〕（平成五年二月）
町役場松居技師の三角測量法によって実測した結果は別図のとおりである。

測量作業中に近づいてきた八〇歳の古老堤与平氏の話では、約六〇年ほど前に東側の柱根を掘られたことがあるが、約二層ほど掘り下げて底石は見えなかったようである。

記録と実測を比較すると次のとおりである。

高さ	実測(尺)	記録
丸石柱、東側六・八〇 西側六・八三	一〇・七五	
笠石上部、東側七・六五 西側七・七一	八・一八	
柱の内側五・八〇 外側七・七八	一・一五	
柱直径	東側〇・九八 西側一・〇〇	

比較すると、柱の直径で約〇・一五尺、高さで約三層の差がある。

この差は、地中に埋もれた部分があるので、地下部分を含めると記録の数値になるのではなからうか。

明治三年（一八七〇）の水害に、鳥居の根が二・四二層ほど流失したが基礎石は見えなかったという高宮

の記録や、約二層ほど掘ったが底が見えなかったという古老の話などから考えると、建設の当初から相当埋設されたものと、その後何らかの原因によって埋もれた部分があるので、地下の底部では記録にある数値に近いのではないかと推測される。

少し離れて鳥居をながめると、大きな鳥居の割合に、高さとの釣り合いがとれていないような印象を受けるが、埋もれていると思われる高さを加味すると、実に雄大なものであると、感にうたれるのである。

表参道

大鳥居の西側に、「これより多賀みち三十三町」と刻んだ道標がある。最後に鳥居と同じく埋もれたのであろう。

神社に至る表参道は、明治二〇年に改修して、三月二五日に完成している。

この改修で、高宮から猿木寄りに進み、飯盛木の傍らに通じていた古来からの旧道を、現在の県道高宮一

多賀線の、直線道に変更された。

実測では延長二六町三三間一、五九三間（二、八九六町）、幅二間半（四・五四町）で、その工事費四、八四三円一五銭七厘で、地方の有志者の寄付によった。

昭和八年発行の『神社史』に表参道二八町とあるのは、経路変更によって、道標に刻まれた三十□町が旧道であり、改修によって二町余り短くなったことを示して、歴史の変化を教えている。

また別に新しい句碑が建てられている。碑の表面に「みちばたに多賀の鳥居の寒さかな 尚白」と刻まれている、側面には「尚白は芭蕉の高弟にして、大津の医者なり、享保七年（一七二二）七月没」と説明が刻まれている。

裏面の建立記に「昭和五七年七月、彦根史談会、細江敏建立」とあり、有名な「尚白」の俳句を刻み残して、表参道口にふさわしい雰囲気をとどめている。

鳥居に ① 大水による災害

からむ説話 鳥居わきの大きな常夜灯は一基である、初めは一对であったが、たびたびの洪水によって、台石とともに流失するので、一基は尼子の打籠の馬場に移したとの説がある。

また明治三年庚申九月一八日、午後八時ごろから一時にかけて暴風雨となり、犬上川の堤防が数ヶ所決壊し、高宮村内一帯は泥海となり、家屋に浸水し、床上はもちろん、高いところでは階上に及んだ。

この大洪水の激しい水勢に、鳥居の柱根が八尺（二・四二町）の深さに掘り流されたが、基礎石は露出しなかったという。

② 鳥居の石と土のう

鳥居の石は、町内の四手の山から掘り出された花崗岩であり、三〇尺（約九町）余の高さまで持ち上げるのに、妙蓮寺の裏辺りから土のうを階段状に積み上げて足場とした。

完成後に土のうを取り除く作業は、あらかじめ土のうに通貨を入れておいて、人間の金銭に対しての関心をうまく利用したという。

③ 拾った財布

信州の一族人が高宮宿を通行のとき、大鳥居付近で小判が多く入った財布を拾った。旅人は、これを一時借りて事業を興そうと、多賀神社に祈願して京坂地方に向かった。

幸いに商売は発展し家運は隆昌したので、御礼に財布を拾った場所に寄進したのがこの大鳥居だという。

こういった伝説のあるのは、わが国でも珍しい大鳥居であることの裏づけであると、地元の人々は言っている。

古くから、御代参の有名人や多くの参詣者が、この大鳥居を潜っていよいよ大社の神域に入り、長い旅の道中を思い、神助を得られる喜びを胸にこめて、謙虚な気持ちで本社に向かい歩を速めたことであろう。

この多賀大社一の鳥居は、神域の広大さと、神徳を示そうとする多賀大社の気持ちもあつたかもしれない。



多賀大社一の鳥居(旧中山道高宮宿)

(1) 駅前の大鳥居

——多賀大社昭和の一の鳥居——

「多賀大社には三基の大鳥居がある」。一つは彦根市高宮町中山道沿いに、寛永年間（一六二四～四四）建立された鳥居であり、二つめは多賀大社正面の昭和四年函館市東濱町宮本武之助奉獻による鳥居である。三

つめは近江線多賀駅前昭和一三年大阪市道修町の栗間屋小西久兵衛、ヨシニにより寄進されたいわゆる「昭和の一の鳥居」である。小西は昭和初年の多賀大社大造営の際「神馬舎」「神馬」「神馬資金」「手水舎」「同水道工事費」などを奉献している多賀大社特別崇敬者である。ところで昭和一三年ころはすでに日華事変の最中であり、近江線多賀駅からの武運長久祈願の参拝客が急増していたときである。

『多賀大社造営誌』によると、この昭和の一の鳥居の構造形式は明神造り、石造りとある。その大きさは、柱の真々（柱の中心位置から一方の柱の中心までの長さ）二五尺（七・五七尺）高さ（地盤より笠木上まで）三三尺七寸（一〇・二二尺）柱太さ直径三尺二寸（九六・九六寸）とある。なお、総工事費一万五九九円、用地は近江鉄道会社多賀駅前同社敷地を永久に無償で借り入れたとある。

石匠は当時多賀在任の永曾宇三郎で、当家に建設工



① 大鳥居南側石柱基礎工事



② 大鳥居北側石柱基礎工事
(英姿は永曾宇三郎氏)

事当時の写真が一〇枚余保存されている。この写真を見るまでは大鳥居工事について二つの疑問点があった。

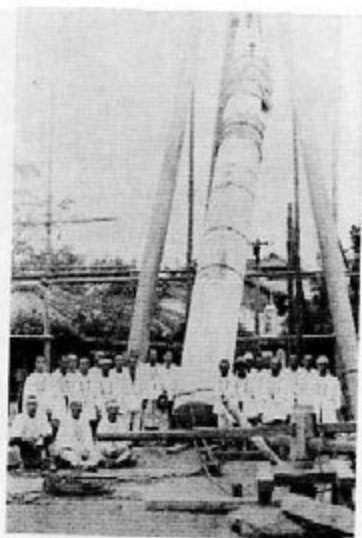
一つは明治三年大上川の氾濫により、高宮の一の鳥居の根元の土砂が八尺（二・四尺）余洗われたが、根元の土台石は現れなかったことである。どのくらい土中に柱が入っているのか。二つめは高宮の大鳥居は妙蓮寺の裏より土糞を階段式に高く築き上げて足場とし、鳥居を建てたということの真偽である。

ところが「昭和の一の鳥居」については、写真も残されており、なお当時工事に携わったただ一人の生存者森新一（平成五年四月死去）に事情を詳細に聞くことができ、昭和の一の鳥居についての前記問題点は解明されたのである。

まず、柱の基礎工事について（写真①②が基礎工事である）。

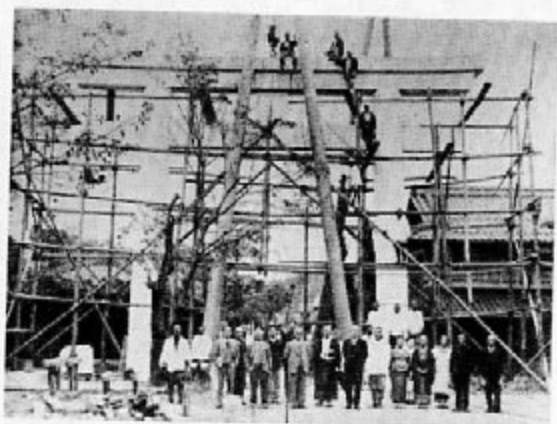
鳥居石柱の南側は土質が軟らかくて二五尺（七・五

尺余）、北側は二五尺（四・五尺余）の縦穴を掘り、地づきをし基礎固めをし、穴の周りには矢板を打つ。縦穴には五尺（一・五尺）の松の杭を多数打ち込み、砂利とコンクリートで基礎地盤を固める。その上に六尺（一・八尺余）を一礎とする花崗岩の土台石を据えて石柱の基礎としたのである。ところで南北縦穴の土質の相違による穴の深さの相違は栗石・砂利・杭打ちによって同一レベルにしなければならぬ。この辺りの工事は責任者、作業従事者全員祈る思いであった。右の同一レベルの高さは現在の地盤下約五尺（一・五尺余）である。したがって石柱の長さは鳥居の高さ三三尺七寸（一〇・二尺余）から笠木・鳥木の高さを差し引き、それに地下埋設分五尺（一・五尺余）を加えたものとなる。高宮中仙道の一の鳥居は地下埋設部分が現在も謎であるが、昭和の一の鳥居は写真もあり、工事に携わった生き証人森新一の証言もあって、基礎部分は明らかとなった。



③ まず南側石柱建立工事

次は石柱の建て方である。写真の③④がその工法を物語っている。使った機具は尖棒二本、かぐら（鴨籠）または手動ウインチ、写真③④にあり）かぐら用ワイヤー、尖棒用ロープおよび三連動滑車二個などである。まず尖棒であるが、四手の近藤字源から献納の立派な檜材二本（根元で直径五〇センチ、末口径三〇センチ、長さ一三〇センチ）、この尖棒は学校の綱引き用綱で引っ張って建てる。かぐら手動のウインチは一六人（四人ずつで四ヶ所に分かれる）で回す。石柱の重さ約二〇ト

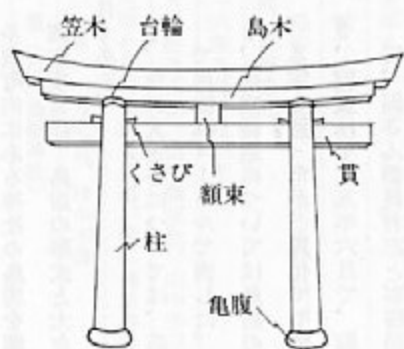


④ 貫・島木・笠木工事

（五、四〇〇貫余）として、一人当たり五〇センチの力で石柱は建つであろうと考えられる。石柱が建てば他の石材は石柱より小さいので引き揚げは可能であろう。

しかし、組み立てについては、最後に森新一のあか

した工事秘話を記すこととする。それは鉛を楔として使用する事である。土台石に石柱を建てるときである。土台石には石柱の入る円型の穴、深さ一寸五分ぐらい（五割ぐらい）が掘られている。その穴に石柱の底部を入れて石柱を建てるのである。穴の直径と石柱の直径は正しく測定されているが、ある程度の余裕がなければ石柱の底部が穴に入って建てることはできない。あまり余裕が大きすぎるとは穴部を作った意義を失う。この辺のゆとりは経験的に定められている。石柱を建てた後は鉛の楔を穴に打ち込んでいく。しかしこれで最終の決定とはならない。それは二本の石柱を建てる際に上部の貫を入れなければならないのである。そこで二本の石柱をロープを使ってかりに建て、石柱間に貫を入れる。貫をつり上げ、予定された位置において石柱を一本ずつ傾けて、石柱の穴に入れるのである。片方が完了して次に他の石柱にとりかかる。さて石柱の傾きを調整しながら、最終的に石柱の傾きを固



鳥居各部の名称

鉛楔を使用したという。そして貫と石柱の接合部には外見的に花崗岩の楔を飾としてとりつけるのである。森の明かした

定する。こうした作業中石柱の底部とその土台石の穴部との間には、あまり大きな動きでは勿論ないけれども、若干の微妙な動きがある。その動きに対応できる楔の素材は鉛でないといけないのである。このことと同時に錆の問題であり、鉛であれば錆の問題もクリアできて素材として最適であるというのである。鉛楔の使用箇所は前記した他に、石柱と貫の接合部および島木と島木のあり接合部、笠木と笠木のあり接合部には

字	神社名	型式	大きさ		建立の経過
			高さ 柱の直径	内幅	
久徳	市杵島姫神社	明神造り	四・三五	〇・六	四・三
木曾	曾我神社	鹿島鳥居	三・六	〇・三	二・六
一門	榎原神社	〃	四・三	〇・四	三・七
栗栖	調宮神社	〃	六・四	〇・五	四・四
入谷	谷神社	〃	三・三	〇・三	二・四
落合	落合神社	〃	三・三	〇・三	二・四
河内	八幡神社	〃	三・九	〇・元	三・二
向ノ倉	井戸神社	〃	三・四	〇・六	三・五
桃原	日吉神社	〃	四・五	〇・七	二・七
八重葎	高松神社	〃	四・四	〇・四	四・七
大岡	八幡神社	〃	四・三	〇・三	四・六
四手	諏訪神社	〃	三・九	〇・三	四・六
尼子	八幡神社	〃	三・八	〇・三	四・七
〃	〃 (境内社日 向神社前)	明神造り	五・四	〇・六	四・〇

かき横にあったが昭和三十五年、御造営のとき日向神社前に
移転、詳細不明
昭和五年三月、工業団地造成により新設
不詳
昭和八年四月、多賀大社馬頭人記念、山本宇三郎、額(八幡神
社)
大正八年九月、小菅兵次郎
昭和一二年四月、安居太一郎、さと
昭和九年九月、氏子上田米吉
不詳、額(八幡神社)
奉納、昭和六年建之、本社氏子利右門、四十三世孫藤井五平八
十一歳、長寿報恩
昭和一六年八月、ほか不詳
昭和九年四月三日、山中興三郎、山中宇三郎、石工吉澤吉次郎
昭和三年七月、守護者発起、額(榎原神社)
明治三三年一月七日、ほか不詳
不詳、額(市杵島姫神社)

秘話は以上の鉛の楔であった。
こうして奉献者はもちろんのこと、建設責任者、作
業従事者すべて真剣そのものである。写真③にあるよ
うに齋戒沐浴をして白装束で神事に奉仕する心構えを
示し、使用するロープなどはすべて新調品である。見
物の一般の人々にも厳しい規制が加えられたという。

(2) 町内鳥居一覧

——多賀町内石の鳥居調査——

多賀町内の鳥居(平成五年六月調)

字	神社名	型式	大きさ		建立の経過
			高さ 柱の直径	内幅	
〃	〃	〃	五・六	〇・五	五・四
〃	〃 (表門前)	〃	八・三	〇・八	六・四
〃	〃 (多賀駅前)	〃	二〇・六	〇・六	六・六
多賀	多賀神社	明神造り	七・五 メートル	一・〇 メートル	五・八 メートル
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃 (東門)	〃	〃	〃	〃

高宮一の鳥居別掲
多賀駅前、別掲
昭和四年、函館市東浜町宮本武之助奉献(日野町出身)遺曆祝
裏参道から、昭和三十五年、御造営のとき東門の跡に移動詳細
不明

多賀町内にある神社の鳥居を調査した。
調査項目は、鳥居の形式と大きさ、建立経過の三項
目である。

- 1、なお大きさについては、高さ・柱の直径・内幅
で単位はメートルで表した。
- 2、建立経過については鳥居の柱に刻みこまれてい
る字を辿ったが、風化で不明な点も多い。
- 3、調査は平成五年六月で、梅雨期の合間を縫っ
て、編さん委員有志と事務局員の手を煩わした。

橋崎	字	神社名	型式	大		建立の経過
				高さ	柱の直径	
敏満寺	八幡神社	胡宮神社 表参道	〃	六・六七 メートル	〇・四〇 メートル	大正二年？ 風化により不明、額（八幡神社）
川相	赤濁神社	〃	〃	〇・四六	〇・三六	大正十一年、玉垣石に吉川宇平次ほか一四人献納者名あり、昭和三七年高速度建設により移転、額（胡宮神社恒憲王）
猿木	猿木神社	〃	〃	〇・四六	〇・三六	四ツ屋裏参道登り口にあったが、名神高速度建設により移動、詳細不明、額（胡宮神社）
藤瀬	八幡神社	〃	〃	〇・三六	〇・三六	昭和八年四月堀川茂平、道明喜三郎、石匠永曾宇三郎、額（八幡神社）
富之尾	大滝神社	〃	〃	〇・三六	〇・三六	不詳、額（猿木神社）
樋崎	八幡神社	二の鳥居	〃	〇・三六	〇・三六	昭和六〇年一月、森茂、森茂一奉納、村の中央、木製大鳥居を道路改修により、石造りとして神社前に建立
						昭和三年四月、御大典記念、額（八幡神社）
						昭和五年四月、村の中央木製大鳥居を道路改修により石造にして移転、額（大滝神社）
						額（大滝神社） 詳細不明
						大正十一年春、重森土蔵、重森千太郎寄進、石工松居六三郎、額（八幡神社）

大君ヶ畑	字	神社名	型式	大		建立の経過
				高さ	柱の直径	
一ノ瀬	〃	聖児神社	〃	四・三三	〇・三六	昭和六〇年五月吉日、大辻吉造、大辻常男寄進、額（聖児神社）
樋田	〃	神明社	〃	三・四二	〇・三六	昭和四六年七月、森清太郎、田中文次郎ほか二人、額（神明社）
萱原	〃	萱原神社	〃	三・九四	〇・三七	昭和九年、凱旋記念、額（萱原神社） 寄進山本孫七
大杉	〃	大神宮	〃	三・三三	〇・三六	昭和六年
小原	〃	高雄神社	〃	三・四〇	〇・三六	昭和五二年二月吉日、寄進大菅萬治
霜ヶ原	〃	聖神社	〃	三・四〇	〇・三六	昭和三九年五月、奉納藤原三四郎、藤原正雄、額（聖神社）
佐目	〃	十二相神社	〃	四・三〇	〇・四一	不詳、額（十二相神社）
大君ヶ畑	〃	白山神社 一の鳥居	〃	六・〇七	〇・五三	奉納藤川伝、安藤直毅、安藤新七、中居捨吉、藤本忠、村岸敏彦、上田正義、村岸定雄、奉納昭和五八年一月、額（白山神社）
	〃	二の鳥居	〃	四・四三	〇・四三	昭和四一年五月、安藤常雄、安藤俊一、額（白山神社）

計 三七基

16 町に残る古謡

(1) かんこ踊り・雨乞い踊り

町史上巻 農民の生活の(6) 村々の踊りには、踊

りの意義に次いで、多賀の踊りや土田の踊りを述べた後、大杉の雨乞い踊りや佐目・大君ヶ畑のかんこ踊りを詳細に記載している。これを見ると、多賀・土田の踊りと、大杉・佐目・大君ヶ畑の踊りとは明らかに異なる点が指摘されていて面白い。

多賀・土田の踊りは、共に天保三年（一八三二）の

古文書により明らかかなように、成就院や般若院が中心となった雨乞い踊りで、物語り的になっている。

一方大杉・佐目・大君ヶ畑などの踊りは多賀・土田の踊りとは異なってその中心はお池岳の竜神や竜宮に雨乞いをしたことが根源となっているようである。

農耕に雨のほしい下流の人々はお池岳山上の霊験あらたかな竜神さんに雨乞いをしたが、大君ヶ畑を素通りしてお池岳へ登ることは許されず、道案内を頼んだため、大君ヶ畑とお池岳とは強いきずなで結ばれて多くの歌が生まれた。

しかもその歌は物語り的ではなく繰り返しが多く行われたところに特長がある。

各字によってそれぞれ歌詞が少しずつ異なっているが、異床同根で強いきずなが感ぜられる。

また、かんこ（羯鼓）踊りについて『日本語大辞典』は次のように解説している。

太鼓おどりの一種。かつこと称する大小のしめ太鼓を

胸にかけ、または脇にかかえて打ちならしながら踊る。

三重県に広く分布し、石川・福井県でも行われる。盆の供養の外、厄役退散や雨乞いなどにも行われる。

なお雨乞い踊りについて同辞典は、

降雨を願う雨乞いの踊りとその御礼踊り、太鼓や鉦をうちならし、雷鳴にたとえ、踊り手が群舞跳躍する。後にしまいや風流太鼓踊りにも転用された。

と記している。

これで両者に通じていえることは、かんこ踊りといふ雨乞い踊りといふ、両者を峻別することは難しいということである。

太鼓や鉦を打ち鳴らして乱舞することにかわりはない。行われる場所について、『広辞苑』は三重県といふ、この辞典は三重県・福井・石川県を加えている。石川県はしばらくおくとしてわが県はこれら両県に隣して、とくに多賀町は三重県とは一衣帯水の仲である。かんこ踊りが行われるのは当然といふべきである。

歌詞については相当長い間、口から口への伝承であるので、多少の飛躍があつて当然で、それが正しいとはいい得ないのではないかと思われる。いずれにしても長い長い間かかって皆の手で作りに上げられたいわば庶民の芸能というべきで、一つ一つに深い意味があり、いずれも捨てがたい味わいのにじみ出ているものである。

今日、文字に表現したものをみて、字足らずや字あまりなどを感ずるのは、踊りを知らない者の言い種で、実際はリズムに乗せてうまく調節されているのではないかと思われる。

たとえば、どの踊りの末尾の文句にも、「すえははるばる長けれど〇〇踊りはこれまで」とある。

これまでは「これーまで」とか「こーれまで」と唱えて語呂を合わせていると思う。要するにもっとおおらかにリズムをとりながら読み下していきたいのである。

かんこ踊り

1、大君ヶ畑のかんこ踊り

大君ヶ畑に伝わるかんこ踊りは数多くあげられるが、主なものは次のようである。

○鎌倉踊りは町史上巻一村々の踊り所載につき略す。歌詞をあげる歌は次のとおり。

○熊谷踊り ○城踊り ○商人踊り

○お経踊り ○長者踊り

2、霜ヶ原のかんこ踊り

○鎌倉踊り ○山武士踊り

○見物踊り

かんこ踊り

① 大君ヶ畑のかんこ踊り

【鎌倉踊り】(略)

【熊谷踊り】

笠は黄金の折笠でござる

しめ緒は白金の のべとかよね
みないちように ならびようで
熊谷おどりは ひとおどり
熊谷おどりは ひとおどり

さても勇まし 熊谷直実

源氏の白旗 風になびかせ

さても見事な 軍立ちや

さても見事な 軍立ちや

平家の一門 みなちりちりと

花の都を あとにみて

西の海路を ただよいて

西の海路を ただよいて

今年二八の 教盛さまは

今をかざりと 親子の縁を

切れて玉緒の 涙かな

切れて玉緒の 涙かな

ここは津の国 一の谷と

上はけわしき ひよどり越えの
馬のひずめも 立ちかねる
馬のひずめも 立ちかねる

おりにたたかい 二人の武者は

赤きよろいの 教盛さまと

栗毛の馬は 熊谷

栗毛の馬は 熊谷

のくにのがれぬ 弓矢の道を

氷のやいば 涙をそえて

むなしく御首 打ちとりた

むなしく御首 打ちとりた

裏の高峯に 声高だかは

花を散らせよ 玉の緒きれよ

きりもかすみも ひとまくり

きりもかすみも ひとまくり

雪をあざむく 玉緒のはだに

はだにおとらぬ 身をうきすがた

敵のおもいも 忘れしや
敵のおもいも 忘れしや
竹のひとふし いついつまでも
血をばこめたる 青葉の笛に
名残りのこした いさおしを
名残りのこした いさおしを
末ははるばる まだながけれど

熊谷おどりは これまで

熊谷おどりは これまで

【商人踊り】

笠は黄金の 折笠でござる
しめ緒は白金の のべかねよ
みな一ように 並びようで
商人おどりは ひとおどり
商人おどりは ひとおどり
商人おどりは ひとおどり

おれが殿御は 二十五になるよ
今年初めて 秋田へくだる
早くおかえりやれ のうや殿御
吹けや北風 西そよそよと
いとしやとのご かいこぎ出した
いとしやとのご かいこぎ出した
声しよほこしよと 出て眺むれば

いとしとのごの 船早みよう

いとしとのごの 船早みよう

やがて帰ると そりや思えども

それも商人の 身でござる

それも商人の 身でござる

おれが殿御は 二十五で出たよ

今年 三十で 帰られた

今年 三十で 帰られた

末ははるばる まだ長けれど

商人おどりは これまで

商人おどりは これまで

【長者踊り】

笠は黄金の 折笠でござる

みないちように 並びようで

長者おどりを ひとおどり

長者おどりを ひとおどり

入口の 左よの木よ

つくづくや眺めて 見てやれば

つくづくや眺めて 見てやれば

もと白金に 中はこがねの

小枝には ぜに(銀)がなりさがる

小枝には ぜにがなりさがる

ぜに倉、米倉、黄金の倉とや

そばなる倉は 酒べくら

そばなる倉は 酒べくら

酒部屋は 三十二間の

ます酒桶の かずしれず

ます酒桶の かずしれず

酒部屋へいずみ いろせうろう

ちようしひかえる ひまはない

ちようしひかえる ひまはない

末ははるばる まだ長けれど

長者おどりは これまで

長者おどりは これまで

【城踊り】

城の天守へ あがりて見れば

京、大坂ふもとが みな見える

みな、いちように ならびようで

城のおどりを ひとおどり

城のおどりを ひとおどり

殿へ参りてお城の懸りを見てやれば

七重のお堀に 八重の戸がは

見事じやよ あの見事じやよ あの

たる木にや黄金の 花が咲く

たる木にや黄金の 花が咲く

殿へ参りて 御門掛りを見てやれば

御門は白金、扉は黄金

見事じやよ あの 見事じやよ あの

おおいにや 黄金のべられた

おおいにや 黄金のべられた

ああ よいお庭よ 見事なお庭

すごろくばんの 表のような

見事じやよあの 見事じやよあの

ちいもこ草も おしなべて

ちいもこ草も おしなべて

末ははるばる 長けれど

城のおどりは これまで

城のおどりは これまで

【お経踊り】

笠は黄金の 折笠でござる

しめ緒は白金の べかねよ

みないちように ならびようで

お経おどりを ひとおどり

お経おどりを ひとおどり

さかい浜に お経がはじまる

おこしゆもこしゆも みなよりやれ

おこしゆもこしゆも みなよりやれ

山寺のやぶこそは 弟こそは

お経がよめいで おはらめす

お経がよめいで おはらめす

けさや衣は 借りてもやろが

千部も万部も えいもまいかよね

千部も万部も えいもまいかよね

千部も万部も 教えもみもせで

今このせつかん ますおきやれ

今このせつかん まずおきやれ

末ははるばる まだ長けれど

お経おどりは これまで

お経おどりは これまで

② 霜ヶ原かんこ踊り

【鎌倉踊り】

一、鎌倉の 御所のお庭に

生えたる松は かしら松

生えたる松は かしら松

一、かしら松の 一の小枝に

めでたやお鷹が 巢をかけた

めでたやお鷹が 巢をかけた

一、その鷹は 何なる鷹や

かたがた羽子え きじに小ばえ

かたがた羽子えは むらさき

かたがた羽子えは むらさき

一、むらさきの 一の小羽子を

御所の姫子に おまらせよ

御所の姫子に おまらせよ

一、末ははるばる まだ長けれど

鎌倉おどりは これまで

鎌倉おどりは これまで

【見物踊り】

おれは おんごく江州の者じやが

上さまかいどは まだ見んほどに

上さまかいどを 見物しよう

上さんかいどは 松にやなぎで

石でたたんで あら見事

石でたたんで あら見事

ここは摺針 佐和山かいと

明日は安土を見物しよう

明日は安土を見物しよう

見たいところは みな見たほどに

京や大坂は 見るに及ばぬ

早く帰りに さんげしよう

早く帰りに さんげしよう

末ははるばる まだ長けれど

見物おどりは これまで

見物おどりは これまで

【山武士踊り】

山武士の 出羽の山武士

宿としかねて うたをよむ

宿としかねて うたをよむ

日本かがやく お月さまは

露に一夜の 宿をかす

露に一夜の 宿をかす

馬にけられし ささら小竹は

はたるにゃ一夜の 宿をかす

はたるにゃ一夜の 宿をかす

末ははるばる まだ長けれど

山武士おどりは これまで

山武士おどりは これまで

雨乞い踊り

大杉の雨乞い踊り

○出歌

○大滝見物踊り

○お兒子踊り

○お寺踊り

○殿踊り

○大治踊り

○行列踊り

○ひょうたん踊り

○楊貴妃踊り

○阿古木踊り

○参宮踊り

雨乞い踊り

—大杉の雨乞い踊り—

【出歌】

わしを忍はば 笠きてしのぶ

笠はこ金の かくれ笠

神を忍はば こ金の鳥の

声のある方へ いざ忍べ

山こえ谷こえ 野原をこえて

向ふに見ゆるは 神の森

あかしの左の 三本松に

目出度き鶴が 巢をかけた

滝のつぼに 黄色い亀が

仙人殿とつれたちて 昆倫山へ登られた

【大滝見物踊り】

皆一ようにならびやあれ

見物踊りは 一踊り

大宮かかりを ながむれば

八つ棟作りの 大やしろ

そこを打過ぎ 拝殿に

すわりて見れば 滝のつぼ

滝より上の と石をば

ひらえばたたと 聞きつたえ

大滝さまの お手のもの

松のばんばを 尋ねれば

昔は犬追物の聞く

から松の下にすむ

川の流れば 道遠く

森の嵐の 声聞けば

ことやひちりき しようのおと

末ははるばる 長けれど

見物踊りは これまで

【御見子踊り】(子供方)

九十九よみの 布持ちて

三月さらして 染つけて

着せてみたやな この見子に

奈良の糸やの ほそ帯

さして見たやな この見子に

百目にかいの あしる笠

きせて見たやな この見子に

こ金作りの かんむりを

めさして見たやな この見子に

末ははるばる 長けれど

お見子踊りは これまで

【お寺踊り】(あやあり)

お寺のかかりを ながむれば

むねは八つむね 松わだぶき

御拝は楠の木 九柱

あや あやのはたおい 手に持ちて

姫こそ世界に 出でられた

御門のかかりは 楼門づくりよ

細工は 飛騨のたくみよ

あやをりをりて ろうをりをりて

金らんどんすは お手のもの

お庭のかかりを ながむれば

幾世立つても つきもせぬ

滝の流れや 法の水

蓮の糸をば くり出して

いさやまんだら 織りましよう

ここは昔は 行者の寺にて

名僧かずかず ござりた

今はその地は 寺の谷

けさをりをりてもこ をりをりて

神や仏を作られた

くどけばはるばる 長けれど

お寺踊りは これまで

【殿踊り】(あやあり)

とのごにもろたる くし箱は

ぬりよし ふたよし 箱もよし

とのご踊りは ひとおどり

あや たからの山に登りてみれば

松にこ金の花さかり

とのごにもろたる 小脇差し

身よし さやよし 袋よし

身より さやより 袋より

心のとのごに そいたやなあ

あや 宝の山に座りて見れば

こ金の色のおみなめし

とのごにもろたる 細帯は

地よし くけよし ためによし

地より くけより ためよりは

心のとのごに そいたやなあ

とのごおどりは ひとおどり

宝の山から目下を見れば

ぼたんしやくやく花さかり

すえははるばるながけれど

とのごおどりは これまで

【大治踊り】

神と呼ばれし 皇后様は

軍出船を なさむれば

赤地の錦に 日の丸

かきたる 帆をあげて

胃は星地の 月輪がた

よろいに日おどし あら見事

お月のつるは三國一の

その名も高き 星を引き

鬼切丸の おんはかせ

海中ゆらりと 打乗りたまうに

大將軍と打ち見えた

神の不思議に

三韓退治を 成されたも

かみに召したる 茂すその

【ひょうたん踊り】

腰にさげたる ひょうたんは

色よく 口よく 成りもよし

色より なりより 口よりは

仙人どのに あいたやな

ひょうたん踊りは ひと踊り

高い山に登りて見れば

彦根の城や 沖の石

腰にさげたる ひょうたんは

さげよし もちよし あるきよし

さげより もちより あるきより

仙人どのに あいたやな

ひょうたん踊りは ひと踊り

高い山に登りてみれば

水にうつるは膳所の城

すえははるばる 長けれど

ひょうたん踊りは これまで

【行列踊り】

けいこの足ひようし そろえてたもれや

先箱四人かち五人

こ金作りの 長刀そろえて

引馬七つ あとおさえ

伊勢の山田を けさたち申して

矢走の渡へ つきにけり

わしが君さま はたちでござる

支那の都へ 官登り

すえははるばる 長けれど

行列踊りは これまで

【楊貴妃踊り】

わしは唐土 玄宗に
仕へし者にて 候へば
我君正しく ましませど
美人にたわむれ なされて
あやのかんこを 腰にならして
姫こそ 世界に出でられた

楊家の娘の その名をば
楊貴妃殿とや 申すなり
然るについに うしないて
君のなげきの 深かりし
(あや)をりをりてろうをおりくくて
金らんどんすはお手のもの

たとえ地の底 おしわけて
姫の行衛を 尋ねよと
君の仰せを うけたりし
蓮の糸をば くり出して

いざ まんだらを織りましよう

天の下は のこさず尋ねよと

君の仰せの 御意なれば

海山越えて 尋ねます

けさをりをりても 織り織りて

神や仏を作られた

蓬萊山に登りてみれど

姫の行衛は しれざりき

あや織り候 さや織り候

姫の帰りを待ち候

すえははるばる 長けれど

楊貴妃踊りは これまで

【阿古木踊り】(竿踊)

わしは九州 日向者

未だ伊勢を 見ざりしに

只今 おもいで立ちて

阿古木踊りは ひと踊り

日向の浦 舟打出して

八重の海路を ほのほのと

分け越す波躍の 共千鳥

阿古木踊りは ひと踊り

あけくれ伊勢の 浦につき

阿漕が浦に 引あみは

度かさなりて あらわれた

阿古木踊りは ひと踊り

あけくれものに 命をば

浮世のわざの 所作なれば

悲しきことの 限りなし

阿古木踊りは ひと踊り

(2) 伊勢音頭

参宮踊りは これまで

すえははるばる 長けれど

いつも春来て 果をかける

目出た目出たの つばくろ鳥は

やれ美しの 大竹小竹

坂の下を 通りてみれば

庭に鶴亀 五葉の松

目出た目出たが 三つかさなりて

やれ美しの お杉やおたま

あいの山を 通りてみれば

伊勢のようだの 宇治橋を

日出た出たで 参れば渡る

【参宮踊り】

関の町を通りみれば
やれ美しの お宮のかかり

多賀町史上巻七三〇ページの伊勢講、七三三ページ

の神明講など、古くから伊勢参宮のために組や仲間を
作り、出し合った会費や共有財産の収益で旅費を作

り、交替で代参する風習があった。

彦根市大藪町では、同年の男子が、成人になると、宿親や親戚らの祝福を受けて、伊勢に参り、帰りの日は村はずれまで関係者が出て、皆が伊勢音頭で迎える慣習があった。

盆踊りの終わりは伊勢音頭で締めくくり、嫁入りや家の新築祝いなどの祝宴は、伊勢音頭の合唱で雰囲気盛り上げるなど、日常生活に切り離せない音頭として定着していた。

歌詞は数多くあり、地域によって異なっていたが、当地方でとくに親しまれていた歌詞は次のようである。

伊勢音頭

一、お伊勢七度、熊野へ三度

お多賀さんへは月参り

一、お伊勢参るなら お多賀へ参れ

お伊勢 お多賀の お子ぢやもの

うちの家には わらで登く

一、君と僕とは 羽織の紐よ

かたく結んで 胸に抱く

一、歌え歌えと せきたてられて

歌も出もせず 汗がでる

一、此処な座敷は 目出度い座敷

上には鶴さん 舞を舞う

下では亀さん 水遊び

鶴と亀との 舞い遊び

一、歌のしまいは かしくで止めて

千秋楽とは お目出度い

以上の歌詞は本町ではもちろん、長浜市付近、栗東町付近において慶びごとに歌われているようである。

一、目出度目出度の 若松さまは

枝も栄えて 葉もしげる

一、目出度目出度が 三ツ重なりて

鶴が御門に 菓をかける

一、お前百まで 私しや九十九まで

共に白髪しらげの 生えるまで

一、坂は照る照る 鈴鹿は曇る

あいの土山 雨が降る

一、伊勢は津でもつ 津は伊勢でもつ

尾張名古屋は 城でもつ

一、差した盃 中見てあがれ

中は鶴亀 五葉の松

一、今日は日も良い 日頃もよいわ

胸もおさまる おめでたい

一、歌いなされや 皆様そろろうた

歌うてこの場の 勇むように

一、お伊勢お伊勢登ぶき お多賀は松お多賀わだ

17 小字名について

町史別巻に町内小字名を記載すること
にした。その理由は、①最近圃場整備

作業が進み、圃場が大きくなり、道路・河川が新しい場所につけ変えられると、旧の小字名・道路・河川の名称は消えて新しい名称になっていく。②山の方も大きい林道ができ、大型機械の導入によって、山林の伐採や山の植栽も昔に比して大きい地域を単位に実施されていく。昔の小さい谷ごとの作業とは様相が一変して、小さい区域ごとの地名は大きい地域単位の名称に変わりつつある。このことはたとえば八重練の山の小字名に明らかである。大きい高松谷がありその中に小さい谷として(藤十郎屋敷・笹原・大平・滝谷・中尾・縦ノ木・米谷・朝日谷・宮前・松掛・砂溜・隠谷・割谷・忠次郎谷・大岩・池ヶ谷・鳶の巣・天の尾・の